
馬の世界にとりっぷ！

佐倉 水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬の世界にとりっぷ！

【Nコード】

N78120

【作者名】

佐倉 水月

【あらすじ】

「動物の世界にとりっぷ」シリーズの作者様方の素晴らしい作品を拝見し、もともと読みたい！と思い書いてみました。元の世界に未練たっぷりな主人公が送る馬族の青年とのお話です。もふもふから若干離れた作品ですので、ご注意くださいませ。

馬の生活から逃げ出したい

拝啓 大好きなお父さん、お母さん

朝夕ひとときわ冷え込むようになりましたが、如何お過ごしでしょうか。

すっかり忘れていましたが、そういえばお母さんは午年だったと、そんな現代日本にいた頃にはどうでもよかったことを最近思い出します。

世の中というのはなんと理不尽なのでしょう。できることなら、もっと穏やかに、平凡に生きていきたいかったです。そう、それこそ牛歩の如くまったりと歩む人生を……。

ですが負けません。遠い世界から祈っていて下さい。今日こそはきつと、こんな場所からおさらばしてやるんです。お父さんに似て、努力だけは誰にも劣らぬはずと信じています。

そして帰ったら、今度こそお母さんのように主婦という名の女王様になるんです。未来の旦那候補達よ、首を洗って待ってなさい。

お二人の丑年の娘、雪乃より

今は遠い世界に向かって祈りを捧げると、私はこっそりとテントから抜け出した。辺りはまだ暗く、高い空には星々が輝いている。足音を立てぬよう、私は慎重にテントの群れから離れていった。真つ暗闇の中、何度も躓きそうになりながら。十分に距離が取れたところで、ようやく溜息をつく。

「ふう、全く、やってらんないわ……」

私自身は大して歩いたわけじゃないが、連日の移動に続く移動のせいで、私の足腰はもうガタガタだ。

ちよつと休憩。

地面にお尻をつくと痛いので、四つん這いになるように蹲り、身体から力を抜いた。

全く人生つてやつは予想もつかないことが起きるものだ。生まれてこの方、初めての異世界トリップが25でだと？　おいおい神様、ちよつと悪戯する相手の年齢も考えてくれませんか。私はつい先日、老後までの人生プランを書き出して、年収700万以上の男性と結婚すると心に誓ったばかりなんですよ。でもまあ、異世界といつても勇者になれとか世界を救う巫女に、とかいかにもな展開じゃないだけマシだったと自分を慰めるしかない。あとは一刻も早くこんな世界から帰還を果たすのみ！

決意も新たに休憩を終えた時だった。

「さつきから何をしているんだ？」

「ひゃああああ！」

突然背後から掛けられた声に驚いた私は、手足をバタつかせて座り込んでしまった。何この情けない状態。羞恥に真っ赤に染めた顔で振り向くと、明るくなってきた空をバツクに立つ漆黒の影。

しまった、思いのほか休憩が長過ぎたんだ。

固まってしまった私を見て、その人は首を傾げた。

「どうした、立てないのか？」

黒い外套から浅黒い筋肉質な腕を突き出し、私の腕を取る。引き上げようとするので私は慌てて首を横に振った。

「た、立てません。腰が抜けて……」というより筋肉痛で足が動かないので、

「そういえば昨日もそう言っていたな。ならば朝から散歩などせずに大人しくしていればいいものを」

「こ、ごもつともです……」

この男の人はデイデイスさん。私がこの世界に来て最初に会った人だ。軽く外跳ねしている黒髪の、額の辺りに白い一房があるのが特徴的。脱色しているのかと問えば、生まれつきだとのこと。最初のうちこそマジでかと驚いたものだが、この世界の様々な人を見るにつれ、髪の色が一部違うとか目の色が片方ずつ違うとか、全然気にならなくなっていった。

気にすべきことはそんなところじゃない。問題は、この人の本性が馬だってことだ！

「乗れ」

そして、私の腕から硬い感触がなくなったかと思えば、眼前には漆黒の毛並みの、私の世界の馬より倍は大きな馬が一頭、首を下げて静かに私を見つめていた。額の部分から顔の中段まで伸びる白い一筋——確か流星とか呼ぶそうだけど——がまだまだ薄暗い世界に妙に眩しく映った。先程まで羽織っていた外套がまだ身体に巻きついていたので、それを取ってやりつつ、私は涙ながらに立ち上がる。これ、本当に馬って言うていい生き物なの？ こう大きいと大型草食獣です！ って感じ。

デイデイスさんの温かな鼻面に抱きつくと、首を持ち上げて器用に背中を押し上げてくれた。その硬い毛を感じながら思う。ああ、せめてもふもふな動物さん達の所にご厄介になりたかった……と。

この世界に来てしまった切っ掛けはよく覚えていない。確か直前まで女子会でしこたま飲んで、今年こそいい男ゲットだと息巻いて、終電に間に合わなくなりそうになって慌てて駅までの道を走っていた……ような気がするんだけど。あれ、そーいや当たった競馬の馬券眺めてにやついていたのはいつだっけ？ ううん、なんか突然足元が崩れて落ちる感覚があった気がした……ような？ 酔っ払ってたからはっきりしない。

朝起きたら素っ裸の男の人に腕枕されてるとか、本気で心臓止まるかと思った。どうやら一線は越えずにいたようだけど、ここに長

居していたらいつそうなってしまうかわかったもんじゃない。始めのうちこそ美形だからまあいいか、とも思えたけれど、彼らを知るにつれ冗談無理無理こんな生活私じゃ長続きしないって！　と思うようになった。

私が紛れ込んでしまったこの世界は、動物と人と動物から人に変身できる獣人の三種類の生き物達が住んでいる。その中で大半を占めるのが獣人、逆に人間は落人と呼ばれる異世界出身者くらいしかないそうだ。ところがそんな本来だったら珍しい落人が、ここ最近頻繁に現れるようになったそう。現在原因を調査中とのこと、早く突き止めて、ついでに是非とも帰る方法を見付けて頂きたい。

話が逸れた。ええと、やってきた落人は獣人の中でもとりわけ強い種族に保護されるそうんだけどね？　ここの世界だと馬より羊の方が角もあって強いってことで、本来だったら私、羊族の主様の所に連れて行って貰えるはずだったのよ。ところがどっこい、馬族の連中ときたら……！　これも何かの縁、別に他種族に渡さなくても、俺らが面倒見てやんよ！　と張り切りまくって現在わたくし、絶賛連れ回され中でございます。

馬が獰猛な種族じゃないとか嘘だと思う。こいつら崖を楽々飛び越えるほどの半端ない脚力してるから、肉食獣に襲われる場面なんて私は見たことないし。先日、獅子族の若いのにからかわれて激怒した馬族のお嬢さんがいたんだけど、獅子をぶっ飛ばした後も怒りが収まらないのか、大木を蹴り倒してたからね。気性もめっちゃくちゃ荒いです。

戻ってきてしまったテントの群れから、続々と外套を羽織った人達が姿を見せ始めていた。そのうちの一人、真っ白い長い髪の背の高い女性が私とディディエスさんを見上げると、ニカツと晴れやかな笑顔を浮かべて言った。

「おおディー。朝っぱらからユキノとデートたあ、てめえも隅に置けねえなあ」

ちょ、んな大声で……！ ああもう、他の人達が微笑ましそうに
ちらちら見てくるのが鬱陶しい。

「長、おはようございます」

軽く頭を下げたディディエスさん。私はといえば聞き捨てならな
い言葉にディディエスさんの背に乗ったまま叫んだ。

「や、止めてくださいよそんな笑えない冗談！」

本当に笑えない。ただ単に脱走が見つかって連れ戻されただけの
ことだ、デートという神聖な恋人同士の儀式と一緒にされては困る。
白い女性——馬族を率いる族長のアカンザさんは、きよんとし
て私達を見比べたかと思えば、何故か大笑いを始めた。そうしてひ
としきり笑った後に、ディディエスさんの首筋をぼんぼん叩く。

「ああそうさな、悪かった。人の恋路を邪魔する奴は、ってえ言葉
もあるくらいだからな。あたしも無粋なことは言わんよ。……んで
？ てめえら婚儀はいつやるよ？」

「だあーかあーらあー！」

悪い人じゃないんだけど。口は悪いけど、むしろ姉御って感じで
気持ちのいい人なんだけど。アカンザさん、思い込んだら一直線で
人の話を全然聞かないところがあるんだよね……。

アカンザさんだけじゃない。この馬族の人達は、一度走り始める
ととことん突っ走る傾向が強くて、人が何言おうがちっとも聞いち
やくれないんだ。種族的にはすらっとした筋肉質な身体に小綺麗な
顔の美男美女が多くて、まあ眼福？ とも思えなくもないんだけど。
でもでも、私だって最低限衣食住の保障は欲しい。

馬族の人達はこの世界で運搬業を生業にしているようで、一箇所
に定住せず、年中あっちだこっちだと行き来している。幼い頃はそ
れこそ羊族の所で生活させてもらったりもするみたいだけど。一度
羊族のノルディ様の所に立ち寄った時なんてもう……何ここ天国か
と本気で眩暈がした。別れ際、ノルディ様の奥様である芽衣ちゃん
に年甲斐もなくしがみ付いて、絶対動くもんかって頑張った。頑張
ったんだけどね……ノルディ様の嫉妬の眼差しを受けてしまつとさ、

今後のためにも上の立場の人には睨まれるわけにはいかないなど。くうつ、でもやっぱり地面に這い蹲ってでも留まればよかった！馬族の人は草食だから食事は野菜ばっかだし、ほとんどの時間を馬の姿で過ごすから着るものは外套一枚でその下は素肌とか普通だし、もう、もう嫌っ！

というわけで。私は虎視眈々と脱走する機会を窺っている。次の街に着いた時がチャンスだと思うんだ。お母さんはモデルだっただけあって、娘の私もそこそこ見られる顔だと思う。きっと涙ながらにお願いすれば、うっかり雇ってくれるところの一つや二つあるに違いない。そうなりやこつちのものだ。信賴を築いた後、落人だと真実を告げてもふもふな上位種にお世話になるんだ。超絶美形で優雅な虎のラヴィッシュ様に、強面でも優しい狼のバリデス様。凛々しい金色豹のカーク様、温厚かつ雄々しい羊のノルディ様、紳士的で元気いっぱいな犬のレヴィアン様、兎なのに鬼畜とか何それ涎が出そう、なルイ様。そしてそして、超絶癒し系力ピバラさんことジエール様！彼らの側には既に落人がいるから、変なフラグが立ちそうもなくて逆に安心する。彼らだってこんな年増、お呼びじゃないだろうしねえ。

ふわふわな毛皮、ぷにぷにな肉球が私を待っているんだわ……！そしていつか、元の世界に戻って今度こそ競馬狂いは止めて、素敵な男性との出会いを果たすのよ。

ディディエスさんに連れられてテントに戻った私は、鼻息荒く荷物を纏め始めた。とはいっても、ここに来る時に持って来ていた物なんて大してありはしない。

「ユキノ、何か落ちているぞ」

背後で人間になったディディエスさんが何かを拾う気配がした。お礼を言って、手だけを後ろに回す。今振り返ってはいけない、絶対！

「ユキノ、これは何と書いてあるんだ？」

「読みますから渡して下さい」

「……残念だ、俺には読めん」

「だから渡して下さいってば。私の世界のものなんでしょう？」

手をびこびこ上下させて催促しているのに、デイデイエスさんはうつむと唸るだけでちつとも言うことを聞いてくれない……馬族め！

仕方がないから頭を使うことにした。文字が書いてある物といえば手帳……はバッグの中にあるし、暇潰しの単行本……もこっちだ。あ、もしかして。

「パスケース？」

私は極力視線を上に向けながら振り返った。うおお、視界内の肌色率高つ！ 服着てよ服！

振り向いたお蔭でデイデイエスさんが眺めていた物が何だかわかった。彼はパスケースに入れていた馬券を見ていたのだ。久々にいい配当だったから、早く元の世界に戻って換金したい。

「私の愛しのスタードロップですね。……そういえば、デイデイエスさんによく似た馬でした」

「何っ！？ ……どういうことだユキノ、お前は俺以外の馬と情を交わしたことが？」

「あ、あるわけないでしょうっ！？」

驚き過ぎて声が裏返ってしまった。馬鹿を言うな、馬なんて競馬場でよく眺めてたけど、情を交わすとか一体どうやれば……というか。

「俺以外の……？」

超聞き捨てならないんですけど。

思わずまじまじと見つめてしまうと、デイデイエスさんの野性味のある綺麗な顔がどんどん近付いてきた。それと同時に、私の上半身は距離を取ろうとどんどん後ろに重心を移して……。

「って痛い痛い痛い！」

上半身を捻りつつ傾けるという芸当に、二十歳を超えたお姉さんの身体は素直に悲鳴を上げた。ところが空気も状況も読まないデイ

ディエスさんは、目を丸くして私の頬を両手で挟み込み、右に左にと動かし始めたのだ。く、首っ、首が！

「ど、どうしたユキノ！どこか怪我でも？」

「——筋肉痛だって言ってるでしょ離れるこの馬鹿！」

後に、アカンザさんに「痴話喧嘩か、本当に仲いいなてめえら」と言われて、私はますます憤慨することになる。

< 終 >

仕事（前書き）

ほのぼのへ辿り着くまで相当先になりますので、苦手な方はお気を付け下さい。

仕事

いざ鎌倉……でなくて、いざ脱走。今こそその時、どさくさに紛れて私は風になる——なんて、こんな状況じゃ無理ですよー！。

「払えないたあどういっつた、ああ!？」

大変です、馬族の女族長、白馬のアカンザさんが大層ご立腹の様子です。今にも鼠族のおじさんに掴みかかるうとして……いや、既に胸倉を掴み上げております。おじさんピンチ、身長が頭二つ分は違うので足が宙に浮いてしまっています。それにしても片手で成人男性を吊り上げるとか、馬族ってばどんだけ馬鹿力なの。本日のアカンザさんは白いワンピースに皮のサンダル姿で、一見どこかのお嬢さんに見えなくもないんだけど……この場を絵にしたらとてもシニールになるね。

溜息をついてそつと視線を逸らすと、店内に並ぶお酒のビンと、ひしつと抱き合う従業員らしき鼠族の少年達が嫌でも目に付いた。あーあ、あんなに脅えちゃって。アカンザさんが怒声を張り上げる度にぴょんと飛び上がる姿が哀れ。

しかし店の主人だというおじさんは頑張っています。必死にアカンザさんの手首を握り返し、喉の奥から声を絞り出しておりますつ。「あ、当たり前でしょうが……。私は荷を届けて欲しいとは言ったが、中身を割っていいとは言ってない!」

わあ、アカンザさんのあの凶悪な顔。鼠族のおじさんも思わず目をきよるきよるさせました……。っつーかさ、もしかして白目剥いてない？ そろそろ助けないとヤバくない？

私はぴつたりと背後に寄り添う塊を振り仰いだ。外跳ね気味のさりりとした黒髪の中に映える白い一房、漆黒の眼差し。優美さはないが野生的で荒削りながら整った面立ちは、十分美形と呼べるレベルだった。私が必死に説得した甲斐あって、今日の彼はゆつたりした貫頭衣にズボンという、元の世界のアラビアンな出で立ちだ。浅

黒い肌と相まっではまり過ぎているので、今度ターバンも探しておこう。

「助けた方が良くないですか？」

彼は顎を引いて私を見下ろすと、淡々と言葉を返してきた。

「どういう意味だ？ 長は今優位な立場に立っている」

「いやいやいや、アカンザさんの心配なんてしてませんで。鼠族の人の方ですよ、一応クライアントでしょう？」

「くらいあんと？ すまんが俺にもわかる言葉で頼む」

「ああすみません…… 雇客っていうか、依頼主っていうか
ディディエスさんはなるほどと頷いた。

「くらいあんと、か。一つ勉強になった」

そして大して興味なさそうに、自分達の族長を眺めながらクライアントと繰り返し呟いている。嫌な予感がして彼の手を叩いて注意を引いた。

「で、いい加減助けてあげた方がいいんじゃないでしょうか」

「長に手助けなど不要だ」

「いや、だからアカンザさんの心配はしてませんってば」

ああ、この会話のテンポの悪さよ。ディディエスさんから言って貰うのは諦めて、私はアカンザさんに近付いてしなやかな筋肉のついた肩を叩いた。……硬い。

「そろそろ離してあげて下さい、その人死んじゃいますよ」

「あん！？ …… なんだてめえかユキノ。邪魔すんじゃない、あたしら馬族の一大事なんだ。他族に舐められて黙ってられっか！」

「いや、だってもうその人、多分聞こえてませんから」

「んだとコラ、あたしの話が聞けねえってのかおい！」

「違うっつーの！」

しかしどうしたものか。こうなると言葉が通じないんだよな。ああ、そんなに揺さぶって。おじさん口から泡吹いてますよ。

少年達からの視線に心が痛い。目をうるうるさせて、助けて！と全身で訴えている。

私は頭を抱えた。

敵を知り、己を知らば百戦危うからず。滞在五日目を過ぎた頃から少し心に余裕が出てきた私は、この世界のこと、馬族のことをもっとよく知る必要があると考えた。

そもそも、落人は何故存在するのか。何か理由があって呼ばれたのであれば、それがなくなれば帰れるのだろうか。この辺は知っている人がいなかったたので保留とする。

次に馬族についてだが、白馬のアカンザをリーダーとし、特定の縄張りを持たず共に行動する獣人の一団がそうと捉えていた私は気になることがあった。移動した先にちらほらと見かけられるのだ、元の世界でも見覚えのある大きさの馬を。彼らは馬車を引いたり獣人を乗せたりと、馴染み深い馬としての役割を負っていた。デイデイスさんに問えば、”言葉無き者”という獣としての馬族なんだそう。かといって上位種である自分達が優れているとか偉いとか、そういった気持ちを持っている馬族の人達はいないらしい。では何故アカンザさんのグループにただの馬がいなかったかというと、上位種の移動速度についてこれないから、という理由しかないそうだ。

そこで私は考えた。デイデイスさんの背に乗って行動している間、どこへ向かうにも皆で、大した大きさの荷物でなくても全員でとやっているのを見てきた。はつきり言って労力の無駄ではなかるうか。何一つ取っても、例えば手紙一通届けるにも民族大移動なのである。団体行動が道中の安全を保障するものであっても、押しかけられた側だってビビるしその辺の草とかこっそり頂いていたら迷惑に決まっている。通りかかった村や街で、またお前達かという呆れにも似た視線を受けることだってしょっちゅうだった。特にそれが顕著だったのは、同じ草食動物である羊族の領地だったけれど。業務の効率化、経費削減は元の世界では常識だ。落人としての意見をアカンザさんに申し出てみたが、彼女は首を横に振るだけだった。

細けえこたあいなんだよ。今までだってそうやってきたんだ、これからだってそうするさ。ユキノ、てめえがあたしらの役に立とうとしてくれんのはありがたいが、落人だからって無理に働かなくたっていいんだ。誰もてめえのことを荷物だなんて思っちゃいねーよ。このアカンザが、てめえの面倒を見ると言っただ。途中で捨てたりなんてしないさ――。

そう言っただと笑うアカンザさんの、何という漢気。世の中の男は彼女を見習うといいよ。その場は思わず姐さん！ と抱きついて、じゃあお言葉に甘えてと暢気にも考えるのを止めてしまったが、やはりこれはない。

神様、私をこの世界に落とした悪戯好きな神様、聞こえますか？ 貴方は私に、馬族を変えてみせろと言いたいのでしょうか。

「アカンザさん、その辺にしろとてあげて下さい」

フンと鼻を鳴らすと、彼女はゆっくりと手を開いた。どさりと倒れるおじさんに泣きながら駆け寄る少年達。

「父さん！」

「わああん、お父さん！」

子供だったのか。自分の父親が吊し上げられて、どれ程恐ろしく、心細かったことが。

「チッ、時間の無駄だったな」

アカンザさん、それは悪役の台詞です。いつだったか元の世界で見た、時代劇の悪党そのまんまだよ。

「行くぞてめえら。胸糞悪い……もうこんな所に用はねえ」

踵を返すアカンザさんの背を、顔を上げた少年がきつく睨み据えていた。ディディエスさんは無表情にそれを一瞥しただけで、族長の後に続こうと、私の背を軽く押す。

本気で居た堪れない。でも、このまま去るのも、後味が悪過ぎる。戸惑う私の耳に、彼はそつと囁いた。

「行こう。いつものことだ、気にするな」

いつも？　これが？　嘘でしょう？

ディディエスさんの目に冗談の色を探したが、結局どこにも見当たらなかった。

「出て行け！　二度と来るな！」

「二度と来るなー！」

少年達の変声期前の高い声に、私の背を押す力が増した。ごめんねと駆け寄っておじさんの介抱をしたいが、彼らはそれを望まないだろう。彼らにとって私は馬族の一員なのだから。そして長の行動について下っ端ですらない居候の私が謝罪するというのは間違っている。

アカンザさんが乱暴に開けた扉をくぐり、大通りを門に向かって歩いている間ずっと、背中に少年達の視線が焼き付いているような気がして寒気がした。

神様、正直私には荷が重過ぎます……。

仕事2

集合場所である川縁に着けば、そこにはアダムとイヴの世界が広がっていた。水浴びをしている者、草の上に寝そべっている者、兄弟とじゃれあっている者。男も女も皆素っ裸。盛り上がった筋肉とか割れた腹筋とかタダで見放題。全然嬉しくない。男はせめて股間を隠せ！

「皆さん服はどうしたんですか」

問えば、ちやぶちやぶ足で水面を蹴りつけていたお姉さんが振り返って言った。

「今洗濯中よあ。乾くまでもうちよつと待っててねん」

近くで川に石を投げ込んでいた青年も唇を尖らせてみせる。男がそんな表情してもちつとも可愛くない。

「別に無くてもいいじゃん。俺ら困ってないし」

何でそんなこと気にするの？ という清らかな視線が私に集まる。裸だなんて、と思うのは私の心が汚れているからか。うぐう、この場は私が不利だ。常識なんて通用しない、何という野生の園……。

「羞恥心……馬族に今一番必要なのは羞恥心だ……。神様、禁断の果実はどこ！？」

「ユキノ、お前の言葉はたまに意味不明だ」

「だってディディエスさん、って服ーッ！」

振り返れば既に上半身裸のディディエスさんが。ズボンに掛けられた手を見て焦った私は必死に止めた。

「下は駄目！ それは最後の砦なんです、そこまでいったら素直に負けを認めるべきです！」

「負け？ 何の勝負だ」

「脱衣マージャンとか野球拳とか……いや、覚える必要はありませんからね！」

ディディエスさんは頭にいくつものはてなを飛ばして首を傾げて

いる。知らなくていい、いつまでも純粋な貴方でいて下さい。……私が教えなければいい話か。

はあ全く、心臓に悪い。これが思春期の女の子相手だったらどうするんだ。悲鳴を上げて逃げてもおかしくないよ。私だって別に見たくないよ。

裸祭りのインパクトのお蔭か、鼠君との一件で感じた強烈な不安感はいぶ薄れていた。それでも腹の底に沈んだ重石は消えない。出会ってからまだ日は浅いが、恩人が他人と揉め事を起こしている場面なんて気持ちのいいものじゃない。

漢らしくワンピースを脱ぎ去ったアカンザさんは馬に戻ると、鋭い嘶きで皆を呼び集めた。馬の姿に戻った面々が彼女の前に整列する。一族を眺めて頷いたアカンザさんは良く通る声で言った。

「そろそろ出発するぞ！ 用事は終いだ！」

「族長、次はどこ行くんですかい？」

「知らん！ とりあえず適当に走ってから考える！」

「おー！」

え、そんな、待って。

私は慌ててアカンザさんの正面に進み出た。

「待って下さい、さっきの、あれで本当にいいんですか？」

「ああん？ 終わったことだろうが」

今更蒸し返すなとその目が言っていた。それでも、ここで終わらせてしまうわけにはいかないと思う。鼠族を束ねるジェラル様の耳に入らないとも限らない。私は嫌だ、カピバラさんから冷たい目で見られる未来だなんて！

「不払いなんてアカンザさんが怒るのも当然だと思いますけど、鼠の人の言い分ももつともだと思っんですよ。結果的に商品を駄目にしてしまったわけですし。馬族への期待つてもあつたと思いますし」

ここで気を付けなければいけないのは、アカンザさんへの配慮。鼠側ばかり庇っては彼女の中の私の評価を損ないかねない。そして

評価が下がり続ければ……きつと話を聞いてもらえなくなる。それでは駄目だ。

そういつた打算がパツと頭を過ぎって、私の気分は下がりにつがった。目の前のこの人は、きつとこういうことを考えたりしない。どんな時にも直球でぶつかっていく。純粹だ。アカンザさんだけじゃない、馬族は皆こういうところがある。でも世の中それだけじゃ終われない。やっていいことと悪いことってのはあるし。やりたい放題するだけじゃ、そりゃ相手は怒るよ。

「もし許されるなら、私に謝りに行かせて下さい。割ってしまった分の代金を返せば、あのおじさんだって多少は怒りを治めてくれるんじゃないでしょうか。今後のお付き合いのためにも、やっぱり信頼関係って大事だと思うんです」

ねえ、どうかわかって。世間様から見た馬族を悪者にしないで。近い内にさよならする予定だけど、拾って貰えたのが馬族で良かったって、衣食住保障なしの貴重なトンデモ体験だったって、笑ってありがとうと言いたくないじゃない。私が力を貸していい方向に変わるんだったら、いくらだって頑張ってみせるよ。代わりに怒られてくるよ。

真剣に思いを込めて、濁りのない金色の目を見つめ続けた。しかし彼女は馬鹿にしたように歯茎を剥き出して嗤った。

「信頼だあ？　ハン、あの鼠は最初っから、あたしらに期待なんかしちゃいねえよ。何本か駄目にするのを見越して多めに運ばせたとか得意気に抜かしやがった。ったく、割れ物ならそうと最初っから言いやがれ！　急ぎだとか言いやがるから近道使ったってのに……とんだ無駄足だったぜ！」

え？　そ、そんな話あったかな。途中で脱走の機会窺ったり商品眺めたりして会話聞いてなかったから、もしかしてその時か。

「それじゃあ、全部が全部駄目になったわけじゃないんですか？」
「さあな。いちいち中身なんざ確認してねえよ。だがあいつらにとつちや同じことなんだろ。一つでも欠けるとぎゃあぎゃあ言いやが

る。そんなに文句があるなら自分達で運べってんだ」

駄目だ……基本的な考え方が全然違う……。一体どうすればわか
ってもらえる？

内心焦っていると、いつの間にか馬に戻っていたディディエさ
んが横に並び、私の腕に顔を寄せた。

「掴まれ。長は間違っていない。お前は少し頭を冷やすべきだ」
私ですか！？

愕然としてそ静かな目を見返すと、彼は促すように再度頭を擦り
付けてきた。

納得いかない。何だかすごく納得いかないんですけど。でも今駄
々を捏ねる空気でもないので、仕方なくディディエさんが脱ぎ散
らかした衣類を纏めてからその頭に抱き付いた。

そうして一行は地響きを立てながら、アカンザさんが決めた方向
にただ走った。私はディディエさんのたてがみをぼんやり眺めな
がら、ただ胸のややもやを感じていた。

しばらくして、栗毛の一頭が声を張り上げた。

「長あー！」

「何だ！」

「そっぴや俺ら、服洗って乾かしてる最中だったんですけど、置い
てきちまいました！ どーしますー？ 大したもんでもねーし、別
にいらねえっちゃいらねえけどー！」

アカンザさんの返答は早かった。

「よし、走ってすつきりしたし戻んぞ！」

「おー！」

……このノリが、私には本当にわからない……。

「気分は落ち着いたか？」

皆から少し離れた草の上に下ろしてもらった私は、ぼんやりとお馬さんや肌色を眺めながら考えていた。いや、決して肌色は凝視したりしてない。むしろピントは合わせないようにしている！……はは、誰に言い訳しているのだろう。

「デイデイエスさん、私の言うこと、そんな間違っていましたかねえ？」

胸の辺りに穴が開いてしまったような空しさがある。理解の得られない思想は異端でしかない。熱くなり過ぎちゃったかな。何だか少し疲れた。移動すると足とか腰とかにくるしね。残りの時間はゆっくりしよう。まあ、昨日とかに比べたら全然マシな揺れだったけど。

私の隣に座った人がちゃんと外套を羽織っているのを視界の端で確認しつつ、真っ直ぐ前を向いたまま呟いた。

「私の考えがわかってもらえないのはこの際仕方ないですよ。生きてきた環境とか違いますし。……でもせめてね、喧嘩するにしても手は出さない方が良かったんじゃないかなと。アカンザさんいい人なんだから、おじさんだって話せばわかってくれたと思うんです。手が出る前に止めてあげられたら良かったのかなあ」

「お前は……」

横顔に彼の視線を感じる。この人は私の言葉をどんな風に受け取っているのだろう。何も言わない他の人達も、私の話は的外れだと思っているのだろうか。

ああでも。やっぱり、このままじゃ良くないよ。アカンザさんがもういいって言っても、鼠のおじさんがわかってくれなかったとしても、双方の意見をぶつけ合うだけじゃわかり合えっこない。仲良くして欲しいと願うのは私の我侫なんだろうか。

「……私、もう一度アカンザさんに言ってみます。アカンザさんだったら、粘れば最終的には好きにしろよって言ってくれるんじゃないかと思うんです。私は辛いのは嫌。苦しいのは嫌。今の状況は胸が痛いんです。だったら、少しでも痛くないように私なりに戦いたい」

立ち上がろうとした私の手を、ディディエさんが掴んだ。中途半端に腰を上げた体勢で見下ろした先の表情に、私は息を飲んだ。

「お前は……」

ディディエさんが、笑っている……？ いつも無表情かそれに近いくらいで、何考えてるか読ませないこの人が。目元を和ませ、唇の端を僅かに上げていた。その目がどこか寂しげな色を含んでいるように感じられるのは何故だろう。続く言葉をなかなか口にしようとしないうちに、しかし私は沈黙など気にならないほど、初めて見たその笑みに見入っていた。

やがてディディエさんはずっと視線を下ろし、唇を開いた。

「それほどに愛しているのだな……長を」

「……………へ？」

思わず目が点になる。何の話？

「長を悪く言われたくないのだろうか？ 別に隠さなくてもいいが、俺に対して想いをぶつけられても、何と返事をしたものか」

そう来たか！！

急に中腰になっていることが辛くなり始め、私はストンとお尻をついた。そして自分の言ったことを振り返る。別に私、アカンザさん愛してる！ とか言っただけ……。

また馬族的思考の暴走かと肩を落とした私に、彼は更に言葉を連ねた。

「白い馬が好きか」

「好きですけど。それが何か」

「だろうな。お前は大層、俺の人型時の額の毛を気にしていた」

もう片方の手で毛先をいじってみせる。悪いけど全然違うよ……それは天然かと疑っただけだよ……。

「別に白が好きだからとか、そんなんじゃないですかね？ 勘違いしないで下さいよ、私は黒い馬だって大好きです」

そう言うとディディエさんは嬉しそうに笑みを深めた。申し訳ないが白かろうが黒かろうが、勝負に勝ちやすい馬だったら何だっ

ていい。また何か勘違いされたら堪ったものではないので、私はこの際はつきり伝えることにする。

「いいですか、はつきり言わせて頂きますけどね。私が好きなのは、馬は馬でも同じ所をぐるぐる回っているお馬さんなんですよ」

競馬なんて言ったってわからないだろうから、わかりやすい易しい表現で先手を打った。回転木馬すらないこの世界だ、どうだ、わかりやすかろう。

胸を張った私だが、目を丸くした彼の言葉に凍りつくことになった。

「それは単に進む方向を決めかねているか、感覚に異常をきたした病気の馬だ。あえてそれが好きとは……凄まじく偏った好みだな……」

健康ですまないと謝ってくるので、私はぶんぶん首を振って否定した。違うから！ 何が悲しくて特に病気の馬が好きとか！

ああ、もう……。脱力感に、気張っていた心がぐずぐずに解けていくのを感じる。

そうだよ、私別に救世主とかじゃないもの。何の力もないただの落人だもの。元の世界では社会人だったけど、今は立派な職業、無職。フリーターですらない喋るお荷物、あるいはエセジョッキーか。他の落人さん達がやっているような、獣人のお世話すらできない。でもいいじゃない、やれることを精一杯やってれば。できなかったらその時また考えよう。異世界でどこまで通じるかわからないけれど、少なくとも仕事で鍛えた営業スマイルだけは全世界共通で使用可能だと信じたい。笑顔と元気さえあれば、人生辛くても何とかなるもんだ。

よし、と気合を入れて立ち上がった私を見上げたデイディエスさんが、ぽつりと呟いた。

「俺は約束は守る。だからお前も」

「はい？ 何です？」

「……いや、気にするな」

そう言って首を振る。何が言いたかったのかさっぱりだが、気にするなと言っただから今でなくてもいいだろう。必要なら何が何でも言ってくるはずだ。

「長の説得に行くのだろう。俺も力になるう」

「ありがとうございます。頼りにしてます」

今はただ、アカンザさん攻略のためだけに頭を使おう。時間が経てば経つほど、おじさんへの謝罪の意味が薄れてしまう。

ディディエスさんが立ち上がり、私の背を押して歩き始めるのを感じている間、私はない頭をフル回転させて思考に没頭していた。

仕事 3

その気のない人に話を聞いてもらうにはどうするか。何かインパクトのある話でも最初に持ってきて興味を引くか……。

「あのですね、ディディエスさん」

「何だ」

「もう目の前にアカンザさんがいるんですけども」

ディディエスさんはそれがどうしたと言わんばかりに私の背をぐいぐい押してくる。

目前の集団の中に彼女はいた。というか、手前にいた栗毛の馬が脇に退いたら、そのすぐ先が真っ白な馬、まぎれもなくアカンザさんその人だったのだ！

彼女を探しながら考えるかと思っていた私の読みは見事に外れた。歩き出してから発見、そして到着するまで、その間たったの30秒。こんな短時間で有効な手段が思い付くような頭なら、とつくに高笑いで衣食住全て揃えている。何とか時間を稼ごうと、地面に突き立てるようにして足を踏ん張っているのだが、相手も容赦なく、崖から突き落とそうとする犯人の如く押し出してくる。

メリメリ、と草が地面から剥がれる嫌な音が。やめろ、押すな、落ちないけど落ちる――！

「おう、どうしたディー、ユキノ。新しい遊びか」

そうか、傍から見ると遊びに見えるのかこれは。

急に馬鹿らしくなって力が抜けた。すると身体は素直に前に飛び出し、アカンザさんの立派な胸筋にぶち当たる。いたっ、鼻打った。やりすぎたと思ったのか、我が相棒殿は慌てて私をアカンザさんから引き剥がした。ちよつと、そんなに強く肩掴まないで。

「い、いえ。用っていうか……ねえディディエスさん？」

ちよつと回れ右して、超大回りしてきていいかな？ この集団の周りを回れば、数十分は考えられるんじゃないかと。確かにね、時

間は早ければ早い方がいいと思ったよ。でももう少し時間をくれてもいいんじゃないですかね、神様？ まだ何にも思い付いてないよ！ 覚悟を決めて来たくせに、本人を見た途端、頭の中は真っ白になった。ただインパクトという文字だけが、ぽつんと空っぽな思考の海に浮かんでいる。

「長、ユキノが長を説得したいと」

「ちょ、ディディエさん！」

おわああ後に引けなくなったああ！

「さあ、存分に長と話し合え。……どうした」

固まってしまった私をいぶかしんで、彼が顔を覗き込んでくる。多分今の私は顔中に冷や汗を浮かべているのだらう。私は物事を始める時、十分に考えてから動くタイプだ。どうしたいのか、どうすべきかがわかっていないと動けない。考えている間は周囲にはぼーっとしているように見えるらしく、のんびり屋だねとか、暢気だねとか、牛みたいとか……そう言われてしまうこともあった。最後のは余計だ、丑年ですが何か？

違う方向に思考が流れそうになり、慌てて言葉を探した。でもどんなに手を伸ばしてもその先にあるのはインパクト。たった一つの単語しか浮かばない頭で、何を話せばいいというのか。誰だ、笑顔と元気さえあれば何とかなると思ったやつは。

「ア、アカンザさんっ！」

「何だよ、もったいぶって」

私は大きく息を吸い込み、ギュツと目を瞑った。ええい、こうなったら奥の手しかない！ さあおいでませ、アドリブの神様！

「わ」

「わ？」

「私と」

「てめえと？」

私と、私と、私と。アカンザさんと、私で。

脳みそがかき回されるような、眩暈にも似た感覚に。私は束の間、

自分が何をしにここにいるのかを忘れてしまった。

「私と——私と一緒に、知らない世界の扉を開いてみませんか？」

「……………！！」

自身でもびつくりして目を開け、ついでに口を閉じるのを忘れた。アドリブの神様は見事にご光臨下さったが、本気で意味不明である。デイディエスさんの前振りも合わせて十分インパクトはあったと思うけど、脱線具合も半端ない。一体何の説得に来たんだっけ。アカンザさんに旦那になってもらうとか……あ、鼠さんの所に謝りに行くんだっけ？ 私が忘れるほど驚いてどうする。

ブルルと誰かが鼻を鳴らす音だけが、静まり返った場に響いた。金色の双眸がまじまじと私を見つめ、白い絹糸のような尻尾がゆらゆら揺れる。

何か反応して欲しくて、私はデイディエスさんに助けを求めた……のだが。何故か彼は額に手を当てて、一人苦しそうな顔をしていた。

「デイディエスさん？ どしたんですか？」

下から覗き込むと、ふいっと顔を逸らされる。

「それほどまでに……白馬が好きか……！」

またか。またその話題に戻るのか。貴方も大概、頭の中が同じ所をぐるぐるしてますよね。

思わず半眼になっていると、ようやくアカンザさんが口を開いたので彼女に向き直った。

「知らない世界の扉を開けるってえのはつまり……次の目的地は兎の国にしろっつーことか？」

「はい？」

何でここで兎の国の話？

ぽかんとする私を見たアカンザさんは「違うのか？」と首を捻った。

「兎の国には、どこの国にも通じる扉があるって話だが」

「何ですって!？」

少し前の話だが、私達は兎の国の館主、ルイさんと三連続で遭遇したことがある。一回目は立ち寄った町で。二回目は目的地で。三回目は依頼主の地で。この男、常に先回りしておるな……と喉をぐくりとさせたものだが、そういう仕掛けがあったとは! 兎が馬に足で勝てるとか凄いわと感心してた私が馬鹿だった。この爆走馬共に勝てる足を持つ動物は滅多にいない。

「マジですか。そんなどこでもドアがあったら……どこでもドアがあったら……」

もしかして、日本に帰れちゃったりする?

私は脳内を荒れ狂うしつこい文字を隅に追いやり、代わりに兎の国をぐりぐりと刻み付けた。そうだよ、来れたんだから帰り道だったあるものじゃない。何だ、案外あっさり見付かったな。ああ良かった、ずっと水に浸した布で拭くだけで、お風呂に入っただけだった。服だって下着以外は同じものの着続けてるし。うんざりしてたんだよね。

どんどん膨らむ期待。何かもう、今すぐ兎の国へ行きたい。無責任かもしれないが、鼠さんとのやり取りなんてどうでもよくなってきた。馬族の人達にとっては多少の争いは日常茶飯事みたいだし? 私が出しゃばる必要なんてなかったんじゃないか。

「じゃあアカンザさん、私、次の目的地は兎の国希望なんですが」
彼女はあっさり頷いてくれた。

「いいさ。何だよ、もったいつけてねえで最初から言えばいいものを」

「すみません。なかなか言い出せなくて……出来ればすぐにでも向かいたいと思っていましたんですけど」

口から出任せは私の悪癖の一つである。でも、上手く渡っていくための技法だと思えば小さな嘘も気にならない。誰かを傷つける嘘は大嫌いだ。

内心小躍りしていると、敵は意外なほど近くにいた。

「……ユキノ、鼠族の話が残っているぞ」

うつ、ディディエスさん……。

見上げれば、曇りのない黒い眼差しが静かに注がれていた。まるで逃げることを許さないと言われているようだ。彼の無言の訴えは常に私を非常に後ろめたい気分にならせてきた。今回も絶好調ですね。威力が半端ないです。

先にあれほど彼に語ってしまったので仕方がないか。面倒臭いなあと思いながら、努めて真面目な顔を作ってアカンザさんに向かい合った。

「……アカンザさん、移動する前に聞いてもらいたいことがあるんです」

「まだ何かあんのか」

「ごめんなさい。本当はこっちが本題でした。」

「さっきの鼠さんとのことなんですが……。考え直してもらえませんか？　そもそも、報酬ってどの程度だったんでしょうか」

答えに、思わず眉を寄せた。店で見た酒瓶三本分の値段だ。くそう、アルコールが入っているだけで無駄に高い水め。

「割った数が三本以下である可能性は……。低い、ですよ……」

何箱も運んだのだから、絶対もつと割っている。そうでなければ報酬から差し引いて、という交渉もできたのだが……。現代日本にいた頃は、通信販売を利用する度、送料なんて無料にしろよと憤っていたものだった。あの頃の私を殴ってやりたい。もっと高くていいはずだ。まあ、この提案は後でするとして。

「じゃあ、誠意だけでも見せましょう。そうですね、できれば弁償と、お詫びのお品でも付けて」

アカンザさんは最後まで話を聞いた後、首を振った。そうだよ、その気がなければいそいそですかって頷くわけがない。溜息が出た。「……これは私の世界の話ですが。鼠算式に増えるっていう言葉があります。鼠の繁殖能力の高さから来る言葉なんです。いいですか、鼠は一ヶ月もあれば子を産むんです。一年経ったらどれほどに

なるかわかります？ ええと、十匹ずつ増えたとして…… 200億くらい？」

数字は適当。正確さは必要ない。ただ話を聞く気になってくれればいい。」

「あの一家を放置して一年経ったら、200億もの馬族嫌いな鼠さんが増えてる計算になるんですよ。200億ですよ！？ 今たった一回謝るだけで、200億匹の鼠さんから嫌われなくて済むんです。絶対今しかありません！」

「そ、そういうもんか？」

「そーですよ！ ちゃっちゃんと謝ってしましましょう！ ちゃっちやとー！」

そして兎の国にレッツゴーですよ。こんな世界とはおさらばさ！ 200億という数字に動揺を見せた彼女はデイデイエスさんに目配せした。この世界の鼠がどの程度の速度で繁殖するかなんて私は知らない。でもさすがに一年でこれだけ増えたらねえ。この国の人口ってどうなってるの？

あれだけ真剣に考えた30秒で何も思いつかなかったくせに、やる気がなくなると途端に口からスルスルと出てくるのだからやつてられない。でもどうやらいい方向に流れていきそうで良かった良かった。多少なりとも恩返しになればいいな。馬族のことを好きな鼠さんが増えてくれれば私も嬉しい。

しかしである。またしても、またしてもここで立ち塞がったのはデイデイエスさんだった。彼は首を横に振ったのである。お前はラスポスか何かか！

「どうしてですかデイデイエスさん。協力してくれるって言ったじゃないですか」

私は早く移動したいんだよ。出すもの出して終わりにしようよ。落人である私と彼ら馬族では食べ物からして違ったので、私専属でついでにいてくれるデイデイエスさんには、一族のお金全てが預けられていた。でも長の決定なに出せないと判断するのはどうい

ことなの？

「すみません、長」

「どうしたディー。何があつた」

「配分を誤りました。報酬を得られると油断していた俺の責任です。今持ち金は底を尽き……ついでに、ユキノに食わせる食事代も出せない状態です」

……………何ですって？

仕事 4

私は思わず天を仰いだ。あー、空が青いなあ。言われてみれば、お腹空いてきたな。今日のご飯は何だろうな。雑草かな、それともその辺に生えてる草かな。いやいや、その葉っぱかもしれない。わお、彩り豊かでより取り見取り……。

「なわけあるかい！ どれも同じじゃないの！！」

突然叫んだ私に驚いたようで、ディディエさんは軽く身を揺らした。

「今晚の私のご飯はないと。その辺の雑草でも食べてると。ほほう、そういうわけですね」

完全に目が据わっていたんじゃないかと思う。胸倉こそ掴まないものの、腰に手を当てて高い位置にある顔を睨むと、彼は若干引いたようだった。

「そういうわけでは……。いや、本当にすまない。好きなように罵倒してくれて構わない」

そう言って目を伏せる。睫毛が長いな、なんて思いながら、鼻で嗤ってやった。

「罵倒？ しませんよそんなの。お腹が膨れるわけでもなし。気分が悪くなるだけです」

わかってるんだよ私、わからないとでも思ったか。接客業舐めんな、こっちは人を観察するのが仕事なんだよ。ぼーっとしているようでも細かいところまで見ようと意識はしているんだよ。

「悪気がないことくらい知ってます。前に私と買い物に行った時言っていましたよね。お金使ってみるのは初めてだって。使い方がよくわからなくて、私がどの程度必要とするのか計れなかったんだろうなってことくらい、ちょっと一緒にいればわかりますよ」

ツンとそっぽを向いてみせると、彼は困惑したように瞬きをしていた。私の言葉と態度が合っていないと思っているのかもしれない。

すみませんね、異世界にはツンデレというカテゴリーがあつてですね。私はそこまで極端ではないつもりだけど、そうそう他人の前で甘い顔は見せないのですよ。

私が見る限り、馬族は族長かそれ以外かの括りしかないようだった。デイディエスさんは別にアカンザさんの参謀というわけじゃない。私を通じて、今までより族長と接する機会が増えただけの普通の馬だ。あれが欲しいこれが欲しいと遠慮なく訴える私を相手に、相当困ったに違いない。ごめんなさい、困ってるのは知ってたけどそこまでお金がないとは思わなくて、知らん振りかましてました。「ユキノ、ユキノ。あんまりディーを責めるな」

アカンザさんが私の背中を前足でちよいちよい搔いた。

「腹が減って気が立ってるんだな。じゃあ、今からでも羊の国へ行くか。あそこは牧草もたんまりあるから、あたしらも好きなんだ」私が行きたいのは兎の国なんだけど。

「……お金がないのに、どうやって食事に取りつけるって言うんですか。美味しい思いをするのは皆さんだけじゃないですか」

「そこはあれだ。『今すぐ食い物を用意しねえと、ユキノが飢えるがそれでもいいのか』って言やあ」

「それ何て脅し文句！？ 止めて下さいよ、恥ずかしいなあ！」

他族からしてみれば、それがどうした？ だよ。何その俺様ぶり。ああもう、ああもう！ 仕方ないな！

「わかりました。少し落ち着きましょうか。ようは私が自分で食べ物確保すればいいって話なんですよ。了解、オーケーオーケー。とりあえず不払い許すまじ！」

「ユキノ、お前が落ち着け。旗に突進する直前の闘牛のようだぞ」「デイディエスさんは黙ってて！」

怒られて彼は素直に口を閉じた。それにしてもこの人の立ち位置は微妙だな。私の味方をしてくれるようでいて、あまり役に立ってくれてない。一見頼り甲斐がありそうに見えるんだけどなあ。お金がないことを告白するタイミングといい、実際は何も考えてなかつ

たりして。まあ彼のことは置いておいて。

「……アカンザさん。私がいる間、そしてその後、今回みたいに支払い拒否が発生するのは嫌だと思ってくれますか」

別にどうでもいいという回答がくるようなら、私がいる間だけになる。

アカンザさんは私の目を見つめながら短く言った。

「そうさな。どうせ走ればすぐに忘れるとはいえ、いい気はしねえよ」

忘れちゃならんだろう、忘れちゃあ……。

「そうだな、長の言う通りだ。俺も常に意識していないとユキノを乗せていることを忘れそうになる」

「忘れないで！？　そこは脳内永久保存フォルダに入れといて下さいよ！？　というか貴方は黙ってて！」

ああ、彼らと話をする頭がくらくらする。遠い目をしかけたが、気を取り直して。

「これからきちんと改善策を話し合いましょう。とりあえず、まずは私が持つてる知識の分だけ先にお話しますから。それからどういう形にしていくのかは皆さんで決めて下さい」

こうと決めたら余所見をしない。いつだって全力で一つのことに取り組んでいく。馬族のこういう気質は好感が持てたし、適度に楽をすることを覚えた身には、大切な何かを思い出させてくれるところでもある。でもとにかく効率が悪い。全員で一つのことしかやってないから、絶対儲かってないってわかってた。まあ、私さえいなければほとんど収入なんぞなくても生きていける彼らだから、今まで文句なんて出なかったんだろうけど。

一つのこと集中したいのであれば、それでもいい。私一人のために生活を変えろと言うのは諦める。だから、請け負ったことは確実にこなして欲しい——そんなことを含めて、訴えた。

数時間前に辿ったばかりの道を再び歩き、見覚えのある店構えの前で足を止めた。振り返り、人型を取った背の高い二人を見上げて念を押す。

「さあ心の準備はいいですか、二人とも。どんなにムカついても今度は絶対に手を上げちゃいけま」

「後ろ向いてたら開けられねえだろ。仕方ねえやつだな、あたしに任せな」

「人の話聞いてよ」

誰も背中扉開けようなんて思っ てないよ。アカンザさんはさつさと扉を開けて中に入ってしまうし、ディディエスさんは馬鹿なやつだなと薄ら微笑みながら呟いてその後続いた。この馬族め！私も急いでお店に入る。

「な、何しに来た！ 帰れ！」

「帰れー！」

案の定。アカンザさんの顔を見た少年達がぴよんと飛び上がったどこかへ引つ込んだかと思うと、箒とハタキを手に戻ってくる。巨人と小人みたいな身長差があるのに、勇敢にも彼女の前に立ち塞がった。胡散臭そうな目で見下ろすアカンザさん。

「どけよ坊主共。邪魔すんじゃない、あたしは謝罪に来てやったんだ」

それ謝罪の態度違う！ 超偉そう！

私は少年達以上に大慌てで彼女の前に割り込むと、涙目でぶるぶる震えている彼らと視線を合わせて謝った。

「ごめんねえ。馬のお姉ちゃんは怖い人に見えるけど、本当はいい人だから」

他人を締め上げるいい人って。自分で言っ てて説得力のなさに笑いが込み上げるよ。

「今度は何もないうちに、私がしっかり止めに入るからね」

でもおじさんが殴られそうになったら勘弁ね、代わりに殴られるのは嫌だから。

心の声は出さずに、子供達が安心するように微笑むと、少しだけ二人の目から警戒心が消えたように見えた。よしよし、子供は素直で良し。

カウンターにおじさんの姿はなかった。建物の中にいればいいけど、もしかしたらどこかに出かけているのかもしれない。

「お父さん呼んでくれるかな？ お姉ちゃん達ね、酷いことしてごめんなさいって謝りに来たんだ」

「……本当に？」

「本当にいー？」

「本当本当。今お父さんどこにいるのかな？」

二人は顔を見合わせた。そして大きい子が口を開く。

「父さんは今、もう馬族が来ませんようにって魔除けのお守りを作ってます」

「……おじさん手先器用だな……っつーか、危なっ！ 本気で私の適当な200億の鼠さんが現実になる予感！ 危なー！

「魔除け？ この店は何かに取り憑かれてるのか？」

「デイディエスさんが不思議そうに店内を見回した。」

「幽霊か？ 何だ、そういう事情があるなら先に言っとけよ。どうりであの親父、払えねえとかおかしいこと言うと思ったら……。まあそんな話なら、今回はチャラにしようってやるさ」

貴方達のことだよ。……突っ込んでやりたかったが、ここで正しってしまうと怒り出しかねないので我慢我慢。二人が馬族で助かった……。

困惑した顔で私達を見ていた子供達は、振り返り振り返りしながら店の奥へ消えていった。そうしてすぐに、若干顔色が悪くなったおじさんが右手にお守りを握り締めながらやってきて、開口一番にこう叫んだ。

「帰れ！ 悪霊退散！」

あーああ、私知ーらないつと。

「大丈夫かよ親父。さっきは悪かったな、そんな事情を抱えてると

は思わなくてよ。おいおい、顔色が悪いじゃねえか。そのうちぶつ倒れるんじゃない？ お祓いとやらは金がかかって大変だろう。今回は別にいいさね、無料にしているとやる。でも次回は頼むぜ、こつちもこれが商売だからよ」

「我々で話し合いを設けた結果、次回からは荷の中身の確認の徹底と、運搬方法の見直しを図ることになった。割れ物は今後急ぎでは取り扱わないから余裕を持つて依頼するといい。そうそう、俺が聞いた話によると、悪霊退治には玄関先に塩を撒くといいらしいぞ」

「しかし、てめえも大変だなあ。ガキ共もいるのに可哀相に。てめえが倒れりや、家族が心配すんぞ。ちゃんと睡眠取ってつか？」

「眠れないのか。ならばそうだな、せつかくこんな酒が置いてあるのだから、多少は自分でも飲んだらどうだ？ 酒を飲むと良く眠れると聞いた」

「ああ、酒。そっぴやユキノに言われて、詫びの品を用意したんだがな。忘れる所だった……これよこれよ。先日縁ある竜族から貰い受けた酒なんだがよ、あたしらは酒は飲まねえんだ。大事な足がふらついちゃならないだろ？ ああでも、こいつあ相当キツイ代物らしいからな。病人に飲ませるわけにもいくまい。だから半額でいいぜ。珍しいから他で売っても良かったけどよ、まあ詫びの印ってことでこの辺でどうだ」

予想通り、馬族の暴走思考ぶりは凄かった。おじさんと子供達の揃ってぽかーんとした顔が目に入らないんだろうね。その後も二人で会話がどんどん盛り上がり、終いにはおじさんは酒飲みの両親から暴力を振るわれる少年時代を過ごした拳句、火事で家族と死に別れ、長じては一念発起して一代でお店を築き上げた英傑となりました。

顔色が悪いのも倒れそうなもの、原因は貴方達だよと突っ込んでやりたいのを、私は必死に耐えていた。ああ、馬鹿だ、途方もなく馬鹿だよこの人達……！ でも面白いから見守っちゃう。

当のおじさんは「ああ」とか「はあ」とか目を白黒させながら相

槌を打っていたが、お酒の瓶を押し付けられて我に返ったようで、のろのろと銘柄を確認した。

「ええと、はあ、これなら半額だとこの辺になりますが……」

「いいぜいいぜ、気に入ったよ親父。また鼻屑にしとくれよ。今度悪霊退治に効きそうな方法を耳に挟んだら教えてやるよ」

じゃあな！ と上機嫌なアカンザさん達と私はお店を後にした。最後まで、口を開きっぱなしな鼠さんの視線を背に感じながら。

これでいいのかなあ？ 首を捻ってしまうが、謝ることは謝ったし、ついでに私の食費も稼げたし、目標プラスアルファってとこなんだけど……。何か想像とずれた気持ちの悪さが。そもそも私の出番はまるでなかったな。修羅場になる覚悟もしてたんだけど。お詫びの品を売りつけるって、大丈夫だったかな……。

どうかどうか、おじさん達の怒りが削がれてますように！

日が西に傾くのを眺めながら、私は何度も何度も神様にお祈りするはめになったのだった。

仕事 5

大通りを真つ直ぐ進んで、門が見えてきた頃だった。心に余裕が出てきたからだろう、ひっそりと往来を眺めていたその人に気付いたのは。茶色の光沢のある髪をした、鋭い金目の目を持つ男性だった。顔は悪くないが、見たところ四十代後半のおじさまで、若干男臭い感じた。彼は地面に敷いた絨毯の上に胡坐を掻き、妙な威圧感を放っていた。

「あの人、前通った時もいましたっけ？」

前に行くディディエさんの裾を軽く引き、小声で囁くと、頷きが返ってきた。気付かなかったな。前は周りを見るところじゃなかったから。

赤を基調として、色とりどりの細かな刺繍が施された上着。ズボンは黒のブツカット。額にバンダナをしており、側頭部に白い飾り羽根を挿している。物凄くお洒落な御仁である。特に馬族を見慣れた私にとっては。

「肉食獣系ですかね。虎族かな、獅子族かな」

ディディエさんは緩く首を振った。

「いや、鳥族だ」

「あちゃー……」

猛禽類に違いない。殺気すら漂っているものだから、鼠族さん達がことごとく避けて通っている。これに気付かなかったとは、私も随分ばんやりしていたものだ。

赤く色付き始めた空に溶け込むような服の色合いと、けれども存在感は誰よりも放つその人に単純に興味が沸いて、私は近寄っていた。目標が私に気付き、顔を向けた途端。

「うっ」

ギロリ。

音がしそうなほど睨まれた。怖い、近付きたくない。足が勝手に

止まる。しかし私の行動に気付いたデイデイスさんは、上機嫌に鼻歌なんぞ歌っているアカンザさんに一声かけるとこちらへ寄って来た。彼女は手をひらひらと振ってそのまま門へと歩いていく。

ギンツ。

またしても物理的攻撃力すら伴いそうな視線が馬族の青年を襲う。けれども。

「ユキノ、どうした」

平然と視線を受け流し、私の前で首を傾げる。さすがデイデイスさん、空気読まない。その様子に身体のコわばりが少し解けた。

「わあ、足がガチガチ。デイデイスさんは怖くないんですか？」

「怖い？」

「あの視線ですよ。ああ苦しかった。心臓を鷲掴みされたような心地がしました。何ですかこれ、鳥族さんの必殺技か何かですか。反則的なスナイパー能力ですね。寿命が縮みましたよ」

「何だと？」

彼は眉間に皺を寄せるとつかつかと鳥族さんの元へ。正面に立ち、怪訝そうに見上げる男性を冷めた眼差しで見下ろしながら言った。

「貴様、誰に断って俺の女に流し目を送っている。蹴り飛ばしてやるるか」

流し目か。随分真正面から見据える流し目だな。控えめさの欠片もなかったよ。チラリどころかギリリだったし。……って、突っ込むところはそこじゃない！

「俺の女って何ですか」

デイデイスさんは意外、という表情を向けた。

「すまない、お前が照れるかと思って控えたつもりだが。言い直そうか。俺の嫁と」

「ランクアップした！」

私は貴方とラブラブするつもりは毛頭ないんですよ。帰る気満々なんですよ。

「安心しろ。俺が勘違いして気持ちが離れることを恐れたのだろう

？ ちゃんとわかっている」

わかってない……！

凄まじい勘違いぶりに、どう訂正すれば理解してもらえるかと頭を悩ませていると、男性が呆れた声を上げた。

「どうでもいいがあんたら、冷やかしたら帰れ」

野太い声だった。でもいい声だ、全体的な男らしさといい、こういうタイプが好きな人は多いだろう。あと気になるのは性格か。口を開けば馬族、みたいなのは減点対象だ。

「冷やかしたと……？ 何故俺がお前を冷やかさねばならない。意味不明なことを言って我々の仲を邪魔するな」

「頼むから帰ってくれ」

早々に白旗を挙げられてしまった。ごめんね、とっても馬族でごめんね。

冷やかしという単語に改めて見ると、彼の膝元にはアクセサリーが並べられていた。路上販売なのだろう。皮紐のシルバーのペンダントや、ビーズの指輪、宝石の付いたブローチなど……ジャンルは無節操だが、小ぶりで可愛いものが多かった。

「これは貴方が？」

思わず問いかけると、彼は「いや」とニヒルに笑った。

「製作者は各国の若手宝飾職人だ。熟練した職人の技もいいがな、駆け出しの若いのが生み出す荒さが気に入って、こういうのを主に集めて販売してる。俺の目に適った物なんだ、売れないはずがない」

「……その割にはお客さんいませんけど……」

「売れないはずがないんだ……！」

手で顔を覆ってしまった。その異様なまでの鋭い視線が隠れれば、単純に彼の言動だけが残って一気に親しみが湧いてくる。案外面白い人のようなのだ。

「いつからここで販売を？」

「一週間前」

「一週間……。で、売れました？」

「おかしい……これは何かの間違いだ……」

「一つも売れてないってことですか」

そんなに長い時間をずっとこうして座っていたというのか。呆れもするし可哀想にもなってくる。値札を見ると質が良い割にそこまで高くないし、一つくらい買ってあげたいと思うが、生憎私の自由になるお金はない。仮に装飾品を買う余裕があるなら食品が欲しい。

「ユキノ、確かお前の名前には、雪という意味があると言っていたな」

興味なさそうに品物を眺めていたディディエスさんが唐突に話を振ってきた。そういえば出会ってすぐの頃、ユキノという発音が怪しい彼に意味を教えてあげたんだった。

私の名に特別な意味はない。生まれた日に雪が降っていた、ただそれだけ。朝方に生まれたらしく、もし日が出ていたら朝陽になっていたらしい。我が親ながら単純なネーミングセンスだと思うが、あの両親のことだ、あまり捏ね繰り回した名前でなくて逆に良かったかもしれない。少なくとも馬族的には良かったらしく、名前の由来を教えるとディディエスさんもその他の皆も正しい発音でユキノと呼んでくれるようになった。

嘆きつつも私達の話聞いていたようで、鳥族さんが顔を上げた。視線が合うとやっぱり背筋が伸びる思いだけど、さっきよりは随分マシになっている。

「雪？　じゃああなたにはこいつがぴったりかもなあ」

そう言って指されたのは、小さな白い花が集まってできた髪飾りだった。花の一つ一つは百合のように花弁が外側に捲れ、中心から青い雄しべが伸びている。非常に細かい細工に目を瞠ってしまう一品だった。

「レディスノウという名の、雪が積もる地域でよく見る花だ。面白いもんでな、昼は周りに紛れるようにひっそりと咲いてるくせに、夜になると光虫を集めるんだ。だから花が光って見える。夜光花と

も呼ばれるな。俺達鳥族はあまり夜飛ばない種類が多いが、上空から見てみると綺麗なもんだぜ。地上に星が散らばってるように見える」

いいなあ、一度見てみたい。彼は見たことあるんだろうか、とディディエスさんを窺うと、肯定するように頷いた。

「馬族では雪の花と呼んでいる。この髪飾りのは花弁が小さいから、あまり積もらない地域のものだろう。本来は豪雪地帯でも育つ逞しい花なんだ。茎が真っ直ぐに高く伸びてな、花も両手を広げたくらい大きい」

冬版ひまわりですかい。

「虫を閉じ込めて消化するまでの間は光っているから、夜道ではいい目印になる。北では道なりに植えていて、実際遭難しかけた旅人がそれで助かることも多い」

へえ。街灯みたいな役割があるのね。光虫万歳ってところ……って、待って。

「聞き間違いならすみません。『虫を閉じ込めて消化』って言いました？」

男二人は声を揃えて言った。

食虫植物だからな。

「怖っ！」

可愛い花が一気に何か得体の知れない物に思えてきた。

「お前に良く似合う。まさにお前のための花だ」

そう言つてディディエスさんは髪飾りを私の頭に当てて頷いている。何か……食虫植物と聞くと複雑なんですけど……。

鳥族さんが「ああそうだ」と幾分気軽になった口調で付け加えた。「花言葉はいくつかあるが、一番知られているのは『私について来い』だな。男でも女でも使えるが、特に男を従えたい気の強い女に人気のある花だ」

ディディエスさんも続ける。

「女側からこの花を贈られると、男は絶望に涙すると言われている」

おいしい！　どこが私にぴったりだっ！？

憤慨する私の髪に花を留めると、彼はその黒い瞳に熱を浮かべながら言う。

「でも、俺は気にならない。ユキノとならどこまでも行ける」

うつ。止めて、そんなにさらりと恥ずかしいこと言わないで。

急にこの距離が近過ぎるように思え、私は一歩彼から離れた。こんな台詞男の人から言われたことはない。よく考えればディディエさんは十分好みの範囲に入る人だった。喋らなければ。これほど残念なイケメンという言葉が似合う人もいないんじゃないか。

熱くなった頬を手で隠すように押さえていると、鳥族さんから期待の声が上がった。

「どうだ嬢ちゃん、安くしておくぜ。どうせもうそろそろ違う場所に行こうと思ってたんだしなあ。俺達が出会った記念に一つ買っていっちゃんくれないか」

「……そうしたいのは山々なんですけど、お金がないんですよー」

「ならその兄さんに買ってもらうちゃどうだ。おいあんた、可愛い彼女にプレゼントの一つも贈ってやったらどうなんだ」

「そうだな……」

ディディエさんは迷うようなそぶりを見せて。

「買ってやりたいが、そうするともう一度ユキノには飢えを覚悟してもらわねばならないな」

「全力でお断りします」

アクセサリーは好きだ。でも、それよりも夕食の方が大事だ。

雑草ルートは何が何でも阻止したい。

私は髪飾りを外すと絨毯の上に静かに置いた。

「ごめんなさい、やっぱりこれは私には必要ないものですから」

男性は大きな溜息をついて艶やかな茶髪を乱暴に掻いた。

「そうかい。まあ馬族の女にや必要ない物かもしれないけど」

「……私は馬族じゃないですけど」

「何だっ？」

しげしげと頭の先から足元まで視線が這った。それを不快と感じる直前、目の前に大きな壁が出現する。

「貴様、やはり蹴られたいようだな。生憎だがユキノは既に俺の嫁。いくらお前が熱い眼差しで誘惑しようとも、俺達の絆は切れたりしない」

嫁じゃないから。誘惑なんてされてないから。ああもう、突っ込む気力もなくなってきたよ。

呆れたのは私だけではなかった。鳥族さんも深く溜息をついた。

「馬族の女を誘惑するほど落ちちやいねえよ」

あまり良くない言われよう。馬族の女性は綺麗な人が多いんだけどな。怒り始めると手が付けられないけど。

「馬族は好みじゃないんですか？ 健康的な美人がいっぱいいますけど」

彼は搾り出すように、苦悩する表情で言った。

「あいつら……会話が通じねえんだ……！」

ああ、確かに。凄く納得してしまう。

前に彼女達に服を着ることの重要性を説いたことがある。真剣な顔をして頷いてくれたから、私もつい力が入ってしまった。語り終わった後、額の汗を拭いながら反応を窺えば、その内の一人が真面目な顔をして質問を繰り返した。

で、ユキノちゃんは何色の蝶が好き？

蝶の話なんてしてないでしょうが！ 何なの、色とりどりの洋服を思い浮かべてそういう方向に捻じ曲げたの？

「わかりますそれ……最早宇宙人ですよね……」

「言葉自体はわかるのに、会話になるとさっぱり意味がわからん。やつら、単語単語を拾って自分のいいように解釈しやがる。男も同じだ。馬族は俺には理解できん」

目の前に馬族代表がいるのでしみじみと頷いてしまった。彼らの

中にあるのは私の感覚がおかしいのかと疑ってしまうのだが、どうやら客観的に見てもそうらしい。良かった、まだ馬族に染まってい。私は少し安堵した。

仕事 6

「しかし、馬族にしてはやけにきっちり服着てるとは思ってたんだが…… あんた、落人か」

鳥さんは顎を撫でながら、私の格好を確認するように何度も視線を往復させた。

「最近多いねえ。鳥族の所にも一人いるんだが……。ふうん、彼女とは全然違うんだな」

そりゃあ、落人といっても様々だろう。でもそんなに違うもの？ ああそうか、他の落人さん達って若い子が多いし。

デイデイエスの背中から離れた私は、絨毯の前に膝をつき、真っ向から彼と視線を合わせた。まだ鳥肌が立つような寒気はあるが、会話して慣れてきた今はもう怖いとは思わない。

「よかつたらその人のことについて教えてもらえませんか？ 鳥族さんの元にいるっていう話は初めて聞きました」

私とは全然違うという人。その人はどんな風にして過ごしているのだろう。帰るための行動は何かしているのだろうか。それとも、もう周囲に溶け込んでいるのだろうか。

期待を込めて見つめると、彼は若干視線を下げた。

「そうだな…… まず、胸がでかい」

「…………… は？」

よーしい度胸だエロおやじ。

私の様子をずっと見ていたらしい長身を見上げる。

「デイデイエスさん、蹴ってもいいと思います」

「奇遇だな。俺もだ」

「ちょ、待て待て待て！」

デイデイエスさんが片足を上げ始めると、エロ鳥さんは慌ててタシマをかけてきた。

「悪かった。事実を述べたまでだが、あんたが気にするとは思わな

かったんだ。本当に悪かった。胸のない女に対して言う言葉じゃなかったな」

「何でしょうこのそこはかとなく感じるムカつきは」
謝られれば謝られるほど腹立たしい気がする。胸は控えめだけど平均くらいはあるんですよこんちくしょう。

鳥さんは気を取り直すように咳払いして続けた。

「それから……背は普通だった。嬢ちゃんよりは高かった気はするがな」

「はあ」

「あと、あの刺激的な踊りには痺れたね。俺はうちの若いのと一緒に挨拶程度に顔出ただけだから、全部見たわけじゃないんだが。できれば最初から見たかったもんだ。くうーっ、あんなにいい女は、もう世界のどこを探しても見付からないだろうなあ」

「……………どんな人ですかそれ」

外見の特徴にしても大雑把過ぎるだろう。全然想像つかない。この人がいい女って言うくらいなんだから、きつと大人っぽいのだろう。スーツでビシツときめた、キャリアウーマン系なのかも。それと踊りがどう関係してくるというのか……。もしかしてエロ方向？私の非難の眼差しを理解してないらしく、鳥の人は更に言い募った。

「そうだ、嬢ちゃんも踊ってみせてくれよ！ 同じ落人だったら踊れるかもしれん。もう一度見てみたいんだ」

「ハ？」

寝言は寝てから言え。

「いや、無理ですからね普通に。踊りなんて言っても、それこそ種類もたくさん……ハッ、まさか……！！」

まさかまさか……！！

私は酔うと記憶をなくすタイプだった。ある日、飲みと一緒に行った友人がおかしなことを言い出した。

『雪乃って面白いよね。何あれ昨日のやつ、忘年会用の一発芸か何

か？ 超うけるんだけど』

当然私は身に覚えがないので聞き返した。すると友人がとんでもないことを言ったのだ。

『あんだ、リンボーダンスなんて踊れたのね』

踊れるわけないじゃんとか冷静に返すと、彼女は他のメンバーにも聞いてみるとだけ言って意味深に笑った。その後のことは思い出したくない。友人に確認しに行ったことで、忘れた方が幸せだった記憶がおぼろげに脳裏に蘇ってしまった。とにかく、穴があつたら入りたいどころか埋まってしまうたかった。頭が痛くなるほど熱心に忘却の神様に祈りを捧げ、闇の中に封印し、嚴重に鍵をかけて沈めたというのに……！

今再び私の頭の中に、ズンズンズンというリズムに合わせて、テーブルの下を潜り抜ける酔った自分の姿が浮かび上がる。

「何で知ってるんですか……貴方スナイパーじゃなくてエスパーですか！？」

わなわなと指を突きつけると彼は首を傾げた。

「いや、俺はマシューだが」

「名前聞いてんじゃないんですけど」

何てこった、何だよ異世界！ あのスナイパーアイは過去もお見通しなのか。とんだ能力者がいたもんだ。元の世界の恥はいい加減忘れさせてくれ！

頭を抱えて蹲ると、そつと肩に重みが乗った。

「りんぼーだんすとは？」

傍らにしゃがみ込んだデイデイエスさん。その曇りのない真っ直ぐな目が私を追い詰める。

「追い討ち？ それは計算ですか？ そんなに私の恥ずかしい過去を暴きたいんですか！」

「ユキノ……俺はお前がどれだけ恥ずかしい女だろうと、変わらず

に愛している」

「ぎゃあ！ なんつー口説き文句ですかそれ！」

ようやく我に返ったのは、鳥さん改めマシューさんの呆れた視線を感じられるまで存分に騒いだ頃。はいはい、ごめんなさいね、貴方の商売の邪魔をしたいわけじゃないんですよ。

冷静になったら急に恥ずかしくなった。スナイパーアイは恐るべき能力だ。でもさすがに相手の過去まで見れるわけじゃないよねえ。取り乱したりして私の馬鹿。

「俺が見たのは情熱的な踊りだったけど、少なくとも恥ずかしいなんて言うような代物じゃなかった。だから恐らく、嬢ちゃんが言うリンボーダンスとやらとは違うと思う」

私が意思疎通ができる状態に戻ったことを確認したマシューさんが、話を戻した。

そうか、世界を飛び回れるマシューさんが言うんだ、きっとこの世界にリンボーダンスはないに違いない。ははは、そんなの素面で踊れる女性って普通いないよね。いたら周囲の度肝を抜く。刺激的とか言う前にぽかーん、だ。何で下をわざわざ潜っちゃってんの？ って、私なら絶対突っ込むね。むしろ踊りだと認識しない。

「ですよ……ありえないですもんね……ああ良かった。で、結局どんな踊りだったんですか？」

彼は宙を睨むようにしつつ唸った。

「そうだなあ、腰を振ってキレのある動きの踊り……と言ってわかるか？」

上手い喻えが思い付かないらしい。わからんよ、と言いかけて、瞬間頭の中でライトがピコンと点灯した。腰振り、キレ。この二つの条件を突破し、恥ずかしくなく、尚且つ落人である私にだったら踊れるかもしれないとくれば！

「ウマウマダンス……！」

閃いたのは、動画サイトでこれでもかとパロディを見かけた可愛

らしい踊りだった。外国の曲に合わせて満面の笑みで腰を振る数々のキャラクター達。私もお気に入りのキャラで検索を掛けて鑑賞したこともある。大きく腰を振る動作は一見簡単なようでいて、やってみると実際は大変だ。カラオケの席で友人達と、どれだけ長く真似し続けられるかという馬鹿げた勝負をしたことを思い出す。一曲分完走できた強者は一人としておらず、翌日普段使わない部分の筋肉痛に悲鳴を上げた。懐かしい。

豊富な女性が踊ったのなら、さぞかし見応えがあったでしょうよ……。

「ウ、馬々？」

首を傾げるマシューさんを、私は冷めた目で見つめた。男ってやつはどうしてこう馬鹿なの。そんなに胸揺れが好きか。また見たいか。だが残念だったな、私が踊ったところで大して面白くもなかるうよ！

内心フハハハと勝利の高笑いを上げたところで、あまりの阿呆さ加減に空しくなってきた。

「その鳥族さんの所にいるって人と、会えたりできないですかねえ？」

できればそのダンスを習得から披露するに至った経緯と、お気に入り動画について語り合いたいものだが。

けれども私のお願いにマシューさんは難しい顔をした。

「難しいだろうなあ。あの嬢ちゃんは今卵抱いてるからな」

「卵？ …… ああ、そういうお仕事ですか？ でもちよつと抜け出すくらいならいいんじゃない？」

「いや、嬢ちゃんが産んだんだ。親が温めてやらないと」

「何を」

「だから卵を」

「卵お！？」

え、何だそれ。産んだって何？ 卵を！？

「相手が鳥族なんだ、生まれるのは卵だろうが」

あんたの世界は違ったのかと聞かれて、私は激しく戸惑った。いや、鳥は確かに卵だったと思うよ。それは間違いない。けれど、私が驚いているのはそこではない。どうして人間が卵を産むんだ。だっておかしいじゃないか、胎盤は何の為に存在するんだ。

私が口をばくばくさせていると、ディディエスさんが宥めるように抱きしめてきた。

「安心しろユキノ。俺とお前の子は卵じゃない、馬だ」

「余計悪いわ」

パシツと腕を叩いて緩い拘束から抜け出した。冗談じゃない、人間の赤ちゃんだって出産の時は死ぬ思いをすると聞く。それが馬？途中で足がつかえて絶対出てこないだろう。そもそも、お腹の中でどの程度まで大きくなるのだろうか。馬族の蹴りは大樹をもなぎ倒す。妊娠中に胎児にそれをやられた時、私は生きていられるだろうか。帝王切開出産なんて嫌だし、生まれてすぐに立ち上がり、歩くような我が子を見て自分の子だと納得できるのか。

帰りたい。強くそう思う。子供は欲しい。でも、何も馬を産む必要なんてないじゃないか。馬ならもうとっくに見飽きたよ。……そういう仔馬は一頭も見えないけど。

明日は兎の国に向けて出発する。もうあれこれ考えるのは止めにして、寝てしまふのが良い。

「そ、そろそろ戻りましょうか。アカンザさんが私達の存在を忘れて移動してしまう前に」

冗談めかして立ち上がった私に、彼は至極真面目に返答してきた。「いや、もう夕暮れ時だ。夜道は危険だ、今から移動はないだろう。長もたかだか一時間程度で我々を忘れるほど情のない方ではない。そこの鳥男のように、一週間もただ座っているというならまた別だが」

「言ってくれるねえ、お馬さんよ」

ゆらりと立ち上った怒気に、背筋が凍るのを感じた。ただでさえ鋭い目をいっそう厳しくして、マシユーさんはディディエスさんを

ねめつける。対するディディエスさんも他族によく見せるあの冷たい眼差しで迎え撃つ。何、君達一体何の勝負を始めているの。

「馬族は喧嘩っ早い。そして一度思い込んだら誰が何を言おうがお構いなしだ。可哀想に、こんなのに纏わりつかれて、嬢ちゃんもさぞかし迷惑してるだろうなあ」

うん、否定はしない。

「隙あらば人妻に色目を使う貴様のようなやつに言われる筋合いはない」

人妻じゃないし。色目も使われてないし。ディディエスさんごめん、本当にフォローのしようがないよ。

マシューさんは僅かな衣擦れの音を立てて立ち上がると、私に手を差し伸べた。

「このまま見過ごすのはあんたのためにならないな。どうだい、俺と一緒に鳥族の下へ来ないか？」

仕事 7

馬族から鞍替えして、鳥族の下へ。何とも魅力的なお話だ。マシユーさんの姿を見る限り、少なくとも衣服くらいはまともなものを用意してもらえそうだし。卵を温めるって言うくらいだから、もちろん巣があるんだよね？ ならば住居もオーケー。あとは食だが、羽があるんだからお願いすれば買出しに行ってくれるだろう、多分。まさに諸手を挙げて歓迎すべきお申し出だった。

ちらりとディディエさんを横目で見ると、彼は眉間に皺を寄せ、マシユーさんを睨んでいる。私は胸の内で溜息をついた。どうもこの人のことがよくわからない。愛している愛していると事ある毎に述べてくれるが、何でこんなに好かれているのだろう。私は彼に何かをした覚えはない。そして、今後もその想いに返してあげられる気持ちなど、私にはないのだ。謹んでお申し出を受けようじゃないか。

……けれども。

「お気持ちだけ、ありがたく頂いておきますね」
首を振ると、意外そうな顔。

「何故だ？ 馬族の生活は大変だろうに。俺達の方が手厚く保護してやれるはずだ」

きつと、本当にそうなんだと思う。雨の日に不安になりながら、天幕に当たる雨音を聞かなくて済むようになるだろうし、日中は部屋の掃除とか洗濯とか、乗馬なんかよりもっと普通のことができる。毎日毎日、平凡で退屈な、けれども穏やかで優しい生活が待っているだろう。それは私が何よりも望むことだ。

「ふん、所詮貴様は敵ではなかったということだ」

「何だと……！」

ああ違う、そうじゃないよディディエさん。

私は後ろめたい気持ちで彼を見上げた。

明日兎の国へ行くからね。今この時に鳥さんの所へ行ったら、余計な大回りだから。だから、マシューさんについて行かない。でも、ごめんなさい。私は貴方のことよりも、明日家に帰ることの方が大事なの。

もう一度溜息をつく。嫌ってくればこちらでも事務的に淡々と過ごせるのに、馬族ときたらどいつもこいつもユキノユキノと私に甘い。くそう、そういうところが憎らしい。

私がいつまで経っても手を取らないと見るや、マシューさんは引つ込めた手で頭をがしと乱暴に搔いた。

「悪い話じゃないと思うんだがな」

頷いて肯定する。

「とてつもなく魅力的なお話ではありましたけど、タイミングが悪かったんですよ」

せめてこの世界に来て数日の内に出会いたかった。そうしたら尻尾を振ってついていっただろう。

「そうかい。……そうだな、俺があと三年若能ければ、いけたかもしれないな」

「ちよつと謙虚過ぎやしませんかね」

せめて二十年にしようよ。三年程度じゃ何も変わらんよ。まあ、そんな昔には私はここにいないけど。

苦笑しつつ互いの目を見て、さてこの話はこれでお仕舞い、それじゃあお元気でと言って踵を返そうとした。あと少しで夜が来る。

そっだ、確か門の近くにパンの間に肉を挟んだハンバーガーのような物売っている出店があったはず。あれを買っていいこう、一個で足りるだろうか——そのようなことを考える私の背に掛けられる声。

「ユキノ、少し待て」

「ちよつと待ちな」

はて、何か忘れ物でもしただろうか。振り返ると、睨み合いを続ける両者の姿。マシューさんがディディエスさんを見据えたまま私に言う。

「こいつをお忘れだ。責任取って引き取ってくれ」

「俺は証明してみせる必要がある。俺はこんな鳥に負けるわけにはいかない。完膚なきまでに叩きのめしてやらねば気が済まない」

はい？

「鬱陶しい野郎だなおい……。嬢ちゃん、こんな大きな物道端に捨てていくな。ちゃんと持って帰ってくれ。それが礼儀ってもんだ」

おおおい……。私は頭を抱えた。ディディエさん、自分から積極的に問題を作らないでよ……。両者の温度差が凄い。ディディエさんは勝手にやる気になってるし、マシューさんは迷惑そうだ。でもちよつと視線を外してくればいいのに、目を逸らした方が負け、とでも言わんばかりに固定したまま動かさない。だからディディエさんがますますやる気になる。

「貴様に勝負を申し込む。俺が勝ったら今後一切ユキノに手を出さない」と誓ってもらおう」

「勝負ってあんた。もうすぐ夜だが何の勝負をする気なんだ」

「早駆けなどどうだろうか」

「おいおい、俺が誰だか忘れてないか？ このマシュー、馬に負けるような翼は持っていないつもりだがな。それに、障害物がない分俺が有利だがいいのかい？」

「翼？ 別に羽ばたいても構わないが。その代わりちゃんと走れ、地面を」

「無茶言つな！」

うん、鳥に向かって走れってないよね。兎と亀並みの勝負だ。もし負けたら馬として……というか動物としてどうかと思ってしまう。話にならないとわかりそうなものだが、彼は何を考えてこんな勝負を申し出たのだろうか。

拒否されたディディエさんはムツとしたようだった。

「何故だ。貴様にも地を駆ける足があるだろう」

「足はあるが、走ることに使わないな」

「……………ダチヨウじゃないのか？」

「違う!!」

怒鳴られて彼はぱちぱちと瞬きした。予想外のことを言われた時の反応だ。私はマシューさんが猛禽類だと思っていたのだが、彼はダチヨウだと思っただけ。ダチヨウ族なんているのか。一つ勉強になった。

「そうか……それはすまない。ずっとダチヨウ臭がすると思っていたのだが……。では貴方は何だろうか。禿鷹か？ 極楽鳥か？」

いきなり態度が軟化した。ダチヨウに何か思うところでもあったのかもしれない。マシューさんも毒気を抜かれたようで、少しだけ目元を緩めて呆れた眼差しで彼を見た。

「何でいきなり禿鷹と極楽鳥なんだよ……。まあ、ダチヨウ臭ってのはあながち外れでもない。昨日まではここに同業のダチヨウもいたからな。ちつとも売れねえってんで、先に移動した」

「そうか、災難だったな。そいつのガラの悪さに客足が遠退いたのだろう。これからは思う存分売るといい」

ダチヨウがガラが悪いなんて私は知らないけど。お客さんがつかないのは多分、ダチヨウさんのせいじゃないと思う……。

「……あんた……これまで俺の話ちゃんと聞いてたか？ いや、聞いているわけないな。いいか、俺も明日には移動するつもりなんだ。だからここでは日没まで——と、そうだ」

マシューさんは何かを思いついたように一つ頷くと、私達を見比べる。何だろう、私とディディエスさんは顔を見合わせた。相手がダチヨウではないとわかった彼の目は、普段の穏やかさを取り戻しつつあった。どうでもいい豆知識、ディディエスさんはダチヨウが嫌い。

マシューさんはニヤツと唇を吊り上げた。嫌な予感がする。

「その勝負、受けてやるよ。ただし、内容は……一つでもこの中の商品を買ったらあんたの勝ち。売れなかったら俺の勝ち。時間は日没まで。どうだ、受けるか？」

私は思わず口を開けた。何だそれは。日没までって、あとそーい

くらないんじゃない？

私は彼の袖を引っ張った。

「ディディエスさん、接客の経験は？」

「ない」

やっぱり。これは先にディディエスさんが出した駆けつこと同レベルで不平等な内容だ。マシューさんが一週間いて売れなかったものを、ディディエスさんが売れるはずがない。当然、断るだろうと思った。嫌いな相手でもなかったわけだし、わざわざ勝負する必要はない。しかしディディエスさんは何を考えているのか、「いいだろう」と頷いてしまったのだ！

マシューさんは実に楽しそうに破顔すると、ディディエスさんの肩を叩いた。

「いい度胸だ！　そういうやつは嫌いじゃないさ。俺が勝ったら……」

：　そうだな、あんたの尻尾の毛を貰おうか。馬の毛を装飾品に使ってみたいて言ってたやつがいてな。丁度いい」

「ならば俺が勝ったら、先程の約束を守ってもらおう」

「いいぜ、金輪際嬢ちゃんには手を出さないと誓う」

実にあっさりとしたものだった。無粋だとは思いつつ、私は横から口を挟むことにした。最初からマシューさんは、私にそれほど強い興味を示していたわけではなかった。それが維持されるというだけの約束。このままではディディエスさんが勝負する意味がない。

「それじゃあつまらない。そもそもこちらが不利な状況なんです、他に何か特典を付けてくれないんじゃないですか？」

男二人は私を見て反論した。

「ユキノ、俺はお前の安全が保障されるならそれでいいんだ」

「嬢ちゃん、男同士の話し合いに首を突っ込んでいけねえな」

マシューさんが嫌な笑みを浮かべて、私はイラッとした。ディディエスさんは交渉事に致命的に向いていない。無欲だし、元から叶っている願い事を改めて条件に出してしまうような人だ。その上マシューさんが私を連れて行こうとしてみせたことで、必要以上に警

戒してしまっている。マシユーさんはそれに気付いていて、あえて勝負を申し込んでいるのだ。勝てるなら重畳、勝てなくても何も損をしない。そんなこと私がさせるか！

ディディエさんの袖をそつと握り、鳥肌が立ちそうになるのを我慢しながら上目遣いで彼を見上げた。できるだけ可愛く見えるようにもじもじしてみる。

「私……ディディエさんが勝ったら、記念に何かプレゼントが欲しいです」

「ぶれぜんと。何が欲しいんだ？ 肉か？」
何で肉になるんだよ。気付け。

私はちらつちらつと控えめに、そしてこれ見よがしにマシユーさんの絨毯の上に視線をやった。ディディエさんはそんな私の顔を穴が開くほど見つめていたが、ようやく私の視線の先を追ってあるものに目を落とす。「ああ」と呟きを漏らした。

「雪の花。そうか、気に入ったか」

「欲しいなあ〜」

「おい嬢ちゃん、何度も言うがこれは俺達の問題だ。あんたは引込んでいてくれないか」

マシユーさんが私の口を塞ごうと手を伸ばしたが、さつとディディエスさんが盾になった。

「俺が勝ったら、ユキノに手を出さないことと、この雪の花をくれないか」

マシユーさんは口をへの字に曲げたが、空を睨んで時間がないことを悟ると渋々頷いた。

「いいだろう、では、始めるとしようか」
「その前に」

ディディエスさんが待ったをかけ、マシユーさんはギラリと光る目を彼に向けた。

「まだ何かあるのか？ 早いところ始めないと、あんたがどんどん不利になるだけだと思っただがな」

「わかつている。だが準備がある、少し待て」
すぐ戻る。ユキノに手を出すな。

彼はそう言い置いて駆け出した。門のある方向だから、アカンザさんへの報告だろうか？

残された私とマシューさんは顔を見合わせる。彼はしかめっ面で大げさに溜息をついてみせた。

「あーあ。あんた、余計なこと言うなよ」

「ふふ、ディディエさんが相手に良かったですね。もし私が相手だったら、賭け事はもっと大きくやってますよ。絶対マシューさんの売り物全部と賭けてましたね。そうするように示唆したつもりだったんですけど……まあ、根が素直ない人なんで」

「はっ、言うねえ。怖い怖い。だが、あの馬の御仁に商売ができるとは思えないがな。負けて泣きを見るのはあんたらの方だ」

「多分ね」

あつさり肯定した私を、彼は不思議そうに見下ろした。

「おいおい……いいのか、仮にもあんたを好いてる相手だろ」

「良くはないです。でも、多分ディディエさんは負けるでしょうね」

他族に向ける無表情と冷たい視線。元々口数が少ないのに、人見知りなのか更にマイナス方向に修正がかかるから、接客業には致命的に向いてない。笑顔の一つもなければ集客からして難しい。

「貴方は商品が売れた方が嬉しいでしょうね？ 負けてもそれほど痛くはないでしょう。もしそれを上回る利益が出せれば」

「それはそうだが」

「じゃあ、私達にハンデを下さい」

私はせかせかと動き回る大通りを見つめたまま、いくつかの条件を提示した。

仕事 8

マシューさんと並んで会話することしばし。デイディエさんは駆け足で戻ってきた。カップ麺を待つほど経ってなかったんじゃないだろうか。あつという間だった気がする。……ん？

「すまない、待たせた。……ユキノ、これを」

彼は腕に白っぽい長い布を持っていた。シートなんて荷物の中にあつただろうか……いや、これはワンピースだ。馬族のお嬢さん方が、人型になった時に着ているやつ。それともう片方の手にはサンダルと私のランプが引っ掛けられていた。

「お帰りなさい。どしたんですかそれ？」

準備つて、もしかしてこれを取りに行っていたのか。ランプは後に使う氣でいたから助かるが、頼んでもいないのに一体何故。

困惑する私に、デイディエさんはワンピースを押し付けた。

「着てくれ。サンダルもこちらに」

それを受け取ったはいいものの、意図がよくわからない。ワンピースとサンダル、どちらも私の持ち物じゃないのに、わざわざ借りてきたのか？ こんな時に？

私が動かないでいると、マシューさんが呆れたように声を上げた。「おい兄さん、こんな所で脱げつつーのは、ちつとばかり問題があるな。その角を曲がった所に目立たない細い通路があるから、そこに行きな」

デイディエさんは頷いて、私の腕を引いた。

「ちょ、ちよつと……」

「いいからこれに着替えてくれ。洗ったばかりだから、汚くないぞ。そついや今日洗濯してたっけね。つて、それはいいとして。」

「そついう問題じゃなくてですね、何でいきなり着替えなんてする必要がありますか？ それとデイディエさんの接客と、どんな関係があるんです」

彼は私の視線をかわすと、マシューさんが並べていた商品の中から、あの雪の花の髪飾りとペンダント、腕輪を手に取った。

「少し貸してくれ」

「何するんだか……まあいいさ、好きにしるよ。持ち逃げするんじゃないぞ」

「わかつている」

……もしかして。

「さあユキノ、時間がない」

心臓が大きく震えた。

私の予想が当たっているなら。私は彼を、見くびり過ぎていたのかもしれない。

ディディエスさんに通路を塞ぐように立ってもらい、私は奥でそこそと着替えを済ませた。ウエストは大丈夫だった。腰が細過ぎる人なんて馬族にはいない。皆さん鍛え抜かれた肉体の持ち主だ。それでも似た背格好の子から借りてきてくれたんだろう、胸の辺りが若干緩い気もするけれど我慢する。長さもくるぶしまで隠れるのでちよつと長いとは思っけれど、ロングワンピースだと思えばいい。サングダルを履いて、今まで着ていた服を腕に掛けて表に出た。

私の支度が終わると、今度は彼が私の髪を軽く掬い、側頭部に雪の花を留める。ペンダントを首に掛け、腕輪を嵌めれば——即席マネキンの出来上がりだった。

マシューさんの元へと戻る彼の隣を歩きながら、私はまじまじと横顔を見つめてしまった。まさかディディエスさんがこんな小細工を……頭を働かせるとは思っていなかったのだ。てつきり直球でお客様を捕まえに行つて、狩か！　ってツツコミを入れるハメになるのだとばかり思っていた。

馬族の着るワンピースは布をちよつと切つて形にしただけの、柄のない本当にシンプルなものだ。だからこそ、どんなアクセサリーとも合わせられる。アクセサリーを付けければ、こんな服でも見栄え

がするんだよって宣伝の仕方もできるだろう。ご自宅に眠っている服も、これがあれば再利用できますよ。貴女の印象にまた違った一味を加えてみませんか——という切り出しはどうだろう。ううむ、これはもしかして、もしかするのではないだろうか。勝負は絶望的だと決め付けていたけれど、期待してもいいのかもしれない。

大通りに戻ってくると、マシューさんは眉を上げて私の格好を上から下まで眺めて言った。

「へえ、そうしてると少し飾り気のある馬族にしか見えないな。案外似合ってるんじゃないか？」

彼にはしばらく洋服と靴を預かっていてもらう。知り合って間がないが盗られて困るようなものはないし、獣人であるということ、何故だか無条件で人間より信頼が置けるような気がしてしまう。

「案外、ではない。実によく似合っている」

「そうかい。ああ、そろそろ始めようか」

男達は頷き合った。勝負開始だ！

私はランプに火を灯す。このランプ、少し前にディディエさんに買って貰ったものなのだが、可愛いデザインでかなり気に入っている。本体は玉ねぎ形のガラスでできていて、菖蒲に似たすつと伸びた葉と小さな花模様が、邪魔にならない程度に入っている。色は入れていないので明るさを殺すこともなく、かといってシンプル過ぎず品がいい。更に細木をよじったような銅の取っ手が付いているから、持ち歩くこともできる。でもそうするにはランプに火を入れたら本体をしっかりと回して嵌めないと、持ち上げたときに落ちてしまふのだけだ。

こっちも準備ができた。さあ、存分に接客をするといいよ。私突っ立ってるから。あ、商品がわかりやすいように、ペンダント照らしておく？

「行くぞ」

「はい行つてらっしゃい……って、ええええ？ あ、ディディエスさん？」

「何だ」

「何で歩く？　そしてどうして私まで一緒に歩いているのでしょうか……？」

手首を握られ、引き摺られるような格好で歩き出す。接客するのってディディエスさんって話だね？　どんどんマシューさんと離れてるんですけど、どこ行くのさ？

ディディエスさんは首を少し傾げた。

「勝負に勝つためだ。一緒に来てくれ」

「ああ、ええ、勝つ気でいるのはいいんですけど。お店からどんどん離れていく気がするんですが」

「それが何か？」

「いや、何かって貴方。品物売るんですよね？」

「そのつもりだが」

何だか会話が噛み合っていないぞ。私は頬がどんどん強張っていくのを感じていた。もしかしなくても、ディディエスさん、接客がどういうものかわかってないんじゃない……？

「うわぁ……予想外だわー……」

思わず口に出してしまう。返せ、私の期待を返せ。ちょっと見直しちゃった私の馬鹿、着替えしてる間にでも、やり方を教えてあげればよかったのに！　本当にもう……何なのこの人？　カッコいいんだか悪いんだか、鋭いんだか馬鹿なんだか、色んな面あり過ぎ。そしてそれを表に出し過ぎ。私疲れてきちゃうよ。

溜息を一つついて、気持ち切り替えることにした。男の勝負に口を挟むのは、彼が負けてからでいい。それまでは好きにやらせてあげよう。彼が短い時間で一生懸命考えたであろう方法の行く先を、共に見届けようじゃないか。自分だけあれこれ考えて悩むのは酷く馬鹿らしい気がするから。

ふと、私のお腹がきゅるきゅると音を立てた。

「腹が空いたか？」

聞こえてしまったらしい。私は羞恥で逃げ出したい衝動に駆られ

ながら呻いた。

「実は……結構空いてたりします」

乗馬は意外に体力をこつそり持っていけるのだ。私はまだ十分に慣れたとはいえず、腹八分目どころか五分目くらいにしておかないと、通る道や速度によっては吐いてしまう。今はダイエットになつていいけれど、そのうち栄養不足になつてしまわないかが心配だった。

彼は私の手を離すと、ふむと顎に手を当てた。

「何か買いに行くか。幸いにして、今日は金が入ったからな」

「え……あの、いいですいいです！ そんな、私のお腹の心配より、自分の心配しなくちゃでしょう！？」

何を言い出すんだ。そりゃあ、お腹の虫は主張してるけど。そんなことより大事なことがあるだろうに。私を理由に負けましたなんて、そんなの絶対許さないから。

睨むと、彼はそんな私の顔を不思議そうな顔で見つめていた。何故私が怒るのか理解できない、という表情で。そういう顔をされると、どうも氣力が削がれる。彼を相手に感情的になるのは間違いだと示されているような、そんな氣がする。彼は馬だ。どんなにそっくりでも、人間じゃないんだ。……あるいは、私何か勘違いをしているだけなのか。見当違いなことでも腹を立てられる不快感は私にも想像がつく。それでも彼が私に対して怒りを示したことなどなかった。冷静に見えるその裏で、彼は一体何を考えているんだろう。

わからない。わからないから——知りたい、と思った。

再び手が伸びてきた。指が触れる直前、しかし躊躇するように少し引く。でもすぐに手首が軽く握られ、そっと引かれた。何だろう今の。何か戸惑っている？

「……空腹では、辛いだろう」

ゆつくりとまた前を向き、歩き出す。ぽつりと零れた呟きに答えることはせず、私は並ぶことなく少し後ろを黙って歩く。

少し風が出てきた。ディディエさんの髪が、外套が揺れている。

大きく開いた襟ぐりに容赦なく冷気が入り込み、私は大きく震えた。もうすぐ冬のこの季節、しかも日没間近な時間帯。日中温められた大地は急速に冷えていく。

「どこから回るか、決めていたわけではない。だから、お前にとってもいい場所に行きたい」

寒さから思わず立ち止まった私を振り返った彼は、そう言つと、片手を喉元に持つていく。巻き付けられた外套の結び目を解くと、私の肩にそつと掛けた。

「……寒いかな？」

ちよつとね。でも、ディディエさんの体温の残る外套は暖かいから、私はゆるゆると首を振る。

「ディディエさんは、寒くないですか？」

「俺は全く。別に服などいらん」

うんざりしたように己の格好を見下ろす。その言いようと仕草に小さく笑った。

「駄目ですよ、それは。少なくとも、私という間は」

私が笑ったことで、ディディエさんの目が細まった。ほつとしたような空気が流れる。あ、もしかして、さっきまでちよつと気まぐずと思っていた？

「ああ、だから、多少窮屈でも辛抱する」

行こう、と強く握られた。今度は手首ではなく、手を。私のとは違い、とても温かい手だった。

いいのかな、時間ないのに寄り道したりして。まあ、私は彼が始めどこに行こうとしてたかなんてわからないけど。

もしかして勝負してることを忘れてるんじゃないかという不安を胸に抱きながら辿り着いた先は――門からほど近い、通りにテーブルを出している一軒のオープンバーだった。

仕事9

私は結構な気分屋で、その場のノリで行動しては反省を繰り返すタイプだ。社会人になってからは、さすがにそれではいかんだろうと自制に自制を重ねて、出来るお姉さんを目指してきた。でも締め付けすぎるとストレスで胃が破裂しそうになるので、気心の知れた友人だけの集まりの時は、反動でついにはっちゃけてしまうのである。……まあつまりはだ。

「ホーツホツホツホ！ 次持つてこーいっ！」

反動なのだ。ついついにはっちゃけてしまうのだ。職場の人間がいない場所では。特に酒が入った時だけは。断じて私のせいではない。全ては酒場なんつーとんでもない場所にエスコートして下さったデューデュー様が悪いのです。最高！

ジョッキをテーブルに叩き付けるように置くと、周囲がどよめくのが辛うじて聞こえた。

うつふつふ、身体がぼかぼかしていい気持ち。雲の上を歩いているような高ぶりと開放感が私を包んでいる。ほら、今なら踊ってあげたっていいよ！ リンボーでもウマウマでも何でもさ！

「おおい嬢ちゃん、そんなに一気に飲んで大丈夫かい」

「ああん？」

この場にデューデューさんはいない。彼は着いた途端に用があるとか何とか言つて、私を置いて店の奥に入ってしまった。好きな物頼んでいてくれと言われたけれど、ざっと見たところ空席はなかったし、むさ苦しい男ばかりの場所で優雅にお食事なんぞできるかっての。案の定、髭面のおっさんに絡まれてしまった。でもね、ご愁傷様でした、この私に飲み比べを提案してくるなんて馬鹿じゃないの？ その馬鹿な御仁はテーブルの上でおねんねしてますよ。

「何よう、あんた私の言うことが聞けないの？ 酒持つて来いっつつてんのよう！」

おずおずと話しかけてきた小太りのおじさんは、ひっと情けない声を上げて、仕事仲間っぽい人が飲んでいたワインボトルを奪って寄こしてきた。そうよ、素直に聞いてくれたら文句はないのよ。

「あ、それ、僕の……」

「あ、あ？　今なんつった？」

「ななな、な、何でもないですはい……」

声が小さくて聞こえなかったただけなんだけど、何か勝手に解決したようだから、気にしなくていいか。

……それにしても男って気が利かない生き物だよねえ。何で私だけ立って飲んでるの。女の子一人立たせておいて、自分達だけ席に着いてるってどうなのよこれ。

「あ、いいこと思い付いちゃった」

鼻歌を歌いつつ、おじさん達が食べていた料理の皿を端の方に寄せた。そうよ、席がなければ作ればいいじゃない。私頭いい。

空いた空間に腰を下ろすと、おじさん達が何か言いたそうな表情で口を開け閉めしていた。はっはっは、残念、私はエスパーではないのだよ。心の声なんて聞こえないね！　言いたいことは口に出してもらわなくちゃ。

あれ、そういえば何か忘れてる気がするけど、何だったっけ。まあいいや、思い出せない時に何を考えたって無駄だ。今はただ、この場にある全ての酒を味見しないといけない。私の中のお酒の神様がそう言っている。

「ユキノ……ユキノ！」

赤くて透明なお酒を飲んでいる途中、肩を叩かれた。

「うるっさいな……何よ！？」

邪魔すんな！　と舌打ちしながら振り向けば、最近見慣れた黒髪のお馬さんが感情表現に乏しい表情で立っていた。ああ、そうそう、一緒に来ていたんだっけね。

「あゝ。で、何か用ですか？」

「待たせた。客を連れてきた」

「客……」

あ、まだそんなことやってたんだっけ。いつけない、お姉さんすっかり忘れてた。で、どんな人を連れてきたのやら……。

彼の後ろに立っていた三人を見た瞬間、私は思わず大笑いしてしまった。いやいや、さすがディディエスさんだね、としか言えないお酒の勢いもあって、なかなか笑いが収まらない。

販売っていうのは一見簡単なようでいて案外難しい。何を売なのか、どの時間帯に誰に売るのはある程度事前に予測を立てて、その上であるものなのだ。それを踏まえてのセールストークももちろんだし、お客を引かせるような押し付けがましさを発揮してもいけないし。要望と違う商品売り付けた日なんざ、後から悲惨な目^{クレーム}に合うこと間違いなし。さまざまな計算と状況を読む力をフル動因させて、いかにその商品に価値を見出してもらうかってというのが販売員の課題だと私は思う。

ディディエスさんには全く期待していなかったのだけれど、もしかしたら、とも思っていた。

「あゝおかしい。すごいですねディディエスさん。よく話聞いてもらえましたねえ！」

現れたのは顔真っ赤で今にもぶっ倒れるんじゃないかっていう強面のおじさんに、陽気に独り言を楽しんでいる足元フラフラな兄ちゃん、髪振り乱して泣き叫びつつ独り言兄ちゃんに絡んでいるおばちゃん。もうすごいチヨイス、としか言いようがなかった。狙ってる？ 私の笑いのツボを狙ってるの？ 何でこんなメンツを選んだ。

「冗談じゃないわよ、あたしのどこが悪かったっていうのよーっ！男を見る目がなかったのはあたしのせいじゃないわよおおー！」
「うん、まああれだ、朝起きたら顔を洗って、ご飯を食べて、仕事に行つて。あれ、顔を洗って、歯磨きをして、ご飯を食べて、手を洗って、靴を履いて。あれ、朝起きてご飯を食べて、歯磨きをして……」

おばちゃん、旦那と喧嘩でもしたか。でも兄ちゃん全然聞いてないよ。兄ちゃんも途中から何言ったかわからなくなったのか、永遠とループしてるし。

「んん、おい小僧、俺たちを一体どこに連れて行こうっていうんだ。俺たちはあれだぞ、そんじょそこのネズミ族とはわけが違う。あー、つまりはだ、大したことなかったら容赦せんつーわけだが」
一番まともっぽいのは赤鬼のようなおじさんだが、目が明後日の方向を向いている。

アクセサリーをさあ。売るわけでしょう私達？ あっは、お客さん全員見事に酔っ払いだね！

名残惜しいけれど、私ももう行かなくちゃいけないらしい。お世話になったテーブルの人達にそう告げると、彼等はそれはもう喜んでくれた。

「いよーし、お客が釣れたら戻って販売やりましょうかあ。で、皆買ってくれるっていう話はもうついてるんですかね」

「いや、とりあえず来いと言ったらこの三人だけが引き受けた」
「まさかの説明ナッシング！」

むしろ何で付いてくるのそこで！

またしてもツボに入ってしまった私は、ディディエスさんの身体に寄りかかせてもらいながら存分に笑い転げたのだった。

酔っ払いの歩みを舐めちゃいけない。あっちへふらふら、こっちへふらふら。まっすぐ歩くなんて高等技術、お酒を飲むと決めた時から放棄したも同然。それが四人もいるのだ。ディディエスさんだけが素面の状態なので、傍から見たらさぞ面白いことになっていただろう。ゾンビのように身体を揺らしながら、時に千手観音の舞状態になりながら、私達は面白いくらいに時間をかけてマシューさんの元へ戻ってきた。

夜空に星が瞬く中、彼はまだそこにいた。

「……ようやく戻ってきたかお前ら……」

ゴゴゴゴ、という効果音すら聞こえてきそうな威圧感を発しながら、眼光鋭く言う。私が手に持っていたランプで中途半端に照らされた顔は、閻魔様って現実にいたらこんな感じ？ というものだった。常であればびびってしまっただかもしれない。けれども忘れるなかれ、我々は今、ある種の無敵状態だったのである。

「あーっはっはっは、マッシュルームさん素敵！ 勇者も泣き出すそのお顔、ハートに直撃スナイパー！ いやっ、真夏の怪談男！」

「マッシューだ！ ……おい、お馬さんよ、約束の時間はとくに過ぎてるわけだが、これは一体どういうことなんだ」

笑い転げる私に会話能力なしと見たか、彼はディディエスさんを標的にしだした。だが甘いな、甘過ぎるというものですよ！

「約束……？ 客は連れてきたが、他に何か？ ああ、借りていた装飾品は、この通り全部ある」

いっぺんに何個もした約束っていうのは、一つか二つは忘れてるってもんだ。記憶力やら集中力がない人だと特にね。ディディエスさんにそれを求めるのは、読みが甘かったな。

まどろみ（前書き）

ディディエス側の裏事情（笑）。初めの方の話です。

まどろみ

ごそごそと寝返りを打つ音に目が覚めた。ちらりと視線を向けた先、鞆一つ挟んだ隣に小柄な塊がある。胎児のように身体を丸めて、デイデイエスに背を向けていた。動いた拍子にずれたのだろ、掛け布に手を伸ばしそつと直してやりながら、彼はここ最近の己の行動を反芻した。

初日に彼女を背に乗せたら落馬しそうになった。その経験から速度を抑え、極力揺れないよう走り方も工夫した。多少足に負担が掛かるが、この程度なら特に問題はない。昨夜は腰が痛いと呼んでいたので、今日はもう少し気を遣ってやりたいと思う。

遅れがちな彼のために群れ全体でスピードを調整し、雨の日は移動せずテントで休むようになった。ユキノはじつとしている方が好きなのか、テントの中にいる間は寛いでいる様子だった。デイデイエスは退屈で仕方なかったが、ちょっかいを掛けて鬱陶しがられる内に学習し、彼女がそつとして欲しいと思っている時、そうでない時を肌で感じ取れるようになってきた。

テントの中で本が読めたらいいのという彼女の願いを叶えるべく長に掛け合ったところ、群れの所持金を任せてもらえるようになった。彼は早速ランプを与えることにした。仕事の完了を報告するために町に入る長に同行し、雑貨店で見付けたはいいものの、自分で使ったことがないのでどれがいいのかわからない。本人に聞くのが一番だと思い、一旦外まで戻って、ユキノを連れて再び店へ。幸い彼女が気に入った物があつたのでそれを購入した。他の物より値段が高かったが、他に急ぎで買い足す必要がある物はなかったため、喜んでくれるのであれば構わなかった。

また、ユキノは足元に生えている草が食べられなかった。なのでしばらくはアカンザが適当に買ってきた野菜を食べさせていたが、これから彼女の食事を用意するのは彼の仕事になった。果物が欲し

いと言っていたので、彼は食べたことはなかったが、美味しそうな物を買うつもりだ。値段が高いものはきつとそうなのだろう。

彼女の好意はわかりにくいが、初対面時の情熱的な一面を考えれば、約束を違えなければずっと寄り添ってくれるはずだ。今はまだ知り合ってから日が浅いため、彼女も遠慮しているのかもしれない。ディディエスは腕を伸ばしてユキノの頭を一撫ですると、目を閉じた。彼女が朝の散歩に繰り出すまでもう少し時間がある。それまでの間、喜ぶ姿を頭の中で想像しながら、静かに身体を休めるのだった。

お味は如何？

例によつて例の如く。あれが食べたいと言われるまま買ひ与えてしまつたデイディエスは、満面の笑みで口を開けるユキノをじつと眺めていた。黄色いそれを回しながら端の方をかじつていく様は、木の実に歯を立てているリスを連想させた。

ふと、彼女が視線を上げる。

「デイディエスさんも食べます？ クレープ」

甘い匂いだけで胸が詰まるような感覚を覚えていた彼は、断ろうと口を開いたが、不意に頬を緩めた。ユキノの鼻頭に白いクリームが付いている。彼女は気付いていないようだ。

「美味しいか？」

ユキノは親指を立てて変わった合図をした。

「そりやもう！ なんか生き返つたつて気がします」

不思議なことを言うものだ。一度だつて彼の前で死んだことがないのに。

彼女の唇から紡ぎ出される言葉の数々は、デイディエスを感じさせると同時に惹きつけた。大抵の言葉を聞き流してしまう彼——これは馬族全体に言えることだが——にしては珍しいことに、きちんと最初から最後まで意識して聞いている。頓珍漢な返答をすると即座に鋭い言葉が飛んでくるのだから、気を緩めることも許されないが、それが何故か心地良く思える。

それはきつと、ユキノだから。

デイディエスは自身で出した答えに満足して目を伏せた。

「はい、どうぞ？」

食べ掛けで申し訳ないんですけど、と彼女が手に持ったクレープなる食べ物差し出してくる。彼が首を振ると、ユキノは不思議そうに首を傾げた。

「私の世界の馬は甘いのが好きなんですけど……デイディエスさんは

「お嫌いですか？」

「好きか嫌いかと問われても答えられないな。求めてそういう物を食べたことはない」

「だったら、尚更どうぞ。美味しいからびっくりしますよ」
「きつと」
そう言つて悪戯っぽく笑つてみせる。彼の目にも、とても美味しそうに見えた。だから。

「では」

デイデイエスは差し出された手をそつと除けさせると、彼女の鼻を一舐めした。

「ふわっ!？」

一瞬にして両者の距離が開く。

「な、なななな!？」

「……………妙な味だ。だが不味くはない。慣れれば恐らく、好ましい」

感想を述べる、ユキノは真つ赤になつて空いた片手でぽかぽかと彼の胸を叩き始めた。

「クリームですか！ 定番の相手の顔をペロリですか！ おのれ、まさか私の身に起ころうとは一生の不覚！」

「恥ずかしいっ！ と叫んでしゃがみ込んでしまったので、彼も付き合つて隣にしゃがんだ。顔を覗き込もうとすると伏せられる。仕方なくあやすように髪を撫でた。」

ユキノはうーうー唸りながら葛藤していたが、やがて顔を上げると拗ねたように唇を尖らせた。

「鏡。鏡がある所で食べる」

子供のような言い方がおかしくて、彼は少しだけ口角を上げた。

「今、とても顔が赤い。耳まで赤くなっている」

「実況せんでいい！」

「……………ユキノ」

「何ですか…………」

地を這うような低音が返ってくる。それに構わず、彼は希望した。

「また、食べたい。お前の顔と一緒に」

ユキノは情けない顔をして、生々しい、と呟いた。生モノだから当然だろうとディディエスと思う。嫌がっていたらもっと激しい抵抗があるはずなので、彼はそれを了承と取り、まだ残っているぞと続きを促したのだった。

羊の国の贈り物（前書き）

さくらさくらさくら様の「羊の国から明けておめでとう」
ます！「への

お礼話となっております。ありがとうございますー！

羊の国の贈り物

依頼を受け、馬族一同が向かった先は、厳しい寒さも跳ね除けるふわもこ……もとい羊の国だった。当初目的地を聞き喜んで騎乗したユキノだったが、次第に口数が少なくなり、やがて。

「何この寒さマジ寒いくそ寒い凍え死ぬ……」

もうずっと前からディディエスの首にしがみ付いたまま、ぶつぶつと呟き続けている。到着しても一向に背から降りる気配のない彼女に困って、彼は軽く首を揺すった。

「ユキノ、着いたぞ」

「んなこたあわかってますよ。寒いから動けないんです。何ですかここ。前来た時はここまでじゃなかったですよ？」

「冬だからな。多少は仕方あるまい」

霜が降りてパリパリになった土を、確かめるように踏みしめる。ユキノは寒い寒いと連発するが、それでも今年はこちら側にまだ雪もなく、例年と比べ暖かい方だった。あの前方に見える山脈を越えてしまうと景色は一変し、全ては白銀に埋め尽くされる。山が雪雲を遮ってくれているお蔭だが、その分下りてくる風は容赦ない。

「多少？　これが多少ですって？　神は私に死ねと仰るか……」

門番に来訪を告げに行っていたアカンザが、戻ってくるなりユキノを見て笑った。

「熱いねえ、そのうち溶け合っちゃまうんじゃないか？」

「長」

畏まったディディエスとは裏腹に、ユキノは不機嫌そうに眉を寄せた。アカンザの格好は襟元の開いた白いワンピースに薄い外套。足元はサンダル。見ていると余計寒くなってくる。

「暖が取れるならこの際何でもいいです。暑苦しいのは嫌いでしたけど、今私の中で人肌の需要が猛烈に高まってるんですよ。何といつか……離れたら死ぬ？　ラブじゃなくて、デッドオアアライブ

？ ふ、ふえつぐしゅっ！」

ずび、と鼻を嚙ると、ユキノはディディエスのたてがみに顔を埋め、汗臭いと文句を言いながらも離れない。

「うっ、耳が痛い。手もいたあ。防寒具って絶対必要ですよねえ……」

けれども周囲にいた馬達は一斉に首を傾げた。

「えー、そーお？」

「別に俺ら、全裸でいいけど」

衣服の重要性を説くと、周りはいつもこの反応である。軽く殺意を抱いたユキノだったが、殴りに行くにも熱源から遠ざかるのが嫌で、大人しく貼りついていた。アカンザはそんな彼女を見上げて問う。

「どうする。中に入るには人の形を取るのが礼儀だ。他はともかく、日頃世話になつてる手前、勝手をするわけにもいかねえが」

アカンザと共に行きたいのであればディディエスを置いていくか、あるいは彼に人型になつてもらふ必要がある。すなわちそれは、彼と離れることを意味する。

「うっん……芽衣ちゃんとノルディ様の顔は見たいですけど、ディディエスさんと離れるのは死活問題ですし……」

手を繋いで歩いたところで、今よりずっと寒い状況になることは目に見えている。

離れたくないと悩むユキノに、ディディエスは嬉々として口を挟んだ。

「ならばここで長を待っていよう。何も無理をして会いに行くこともあるまい」

「てめえが行きたくないってえなら、あたしだけ行ってくるか？別にそれでもいいけどな」

「でもせっかくここまで来たんだから、挨拶くらいはしないとすよねえ。私はともかく、他所の落人さんに会うのは向こうは久しぶりかもしれないし。期待させてたら申し訳ないですし」

「止めておけ。俺から離れるな」

「うーん、行きたいけど、寒い……」

ユキノはしばらく頭を悩ませていたが、唐突にほんと手を打つと、笑顔で行きますと返事し、ディディエスを落胆させたのだった。

門番に案内され、辿り着いた屋敷の玄関に、その二人は立っていた。

「雪乃さーん！ お久しぶりで——あれ？」

馬族代表を見付けるなり大きく手を振った彼女は、くりんと首を傾げた。ユキノも小さく手を振り返すが、心境的には一緒だった。落人仲間である彼女達の頭に、はてなマークが浮かぶ。

顔が見える距離まで近付くと、アカンザは明るく声を掛けた。

「よお！ 元気にしてたか、羊。来てやったぞ」

アカンザさん……とユキノが額を押さえ、羊族の長ノルディは苦笑した。

「相変わらず貴女は……。元気そうで何より。明けましておめでとうございます、今年もよろしく願います」

流れるような優美な所作で、さらりと白銀の髪を揺らして軽く頭を下げるノルディに、ユキノは来て良かったと内心でガッツポーズをきめた。ノルディは長としての貫禄がありながら、その振る舞いはいちいち洗練されていて、本人は物静かな性格だが見る者を惹きつける華やかさがある。そしてその顔立ちは整っているとくれば、もう眼福である。

対するアカンザはお世辞にも優雅とはいえないが、粗野でありながらも下品には感じさせない会釈をすると、にやりと口角を上げた。「ああ、うちのチビ達共々、今年もよろしくな！ そっぴや、チビ達は元気にしてるか？」

大人の馬族のスピードについていけない仔馬達は、大きくなるまでは羊の国に厄介になっている。とはいっても世話をお願いするほど厚かましいことはできないので、基本は放置だ。身重の女、ある

いは幼子の母親達が彼らを指導し、厳しい環境で生き抜く術を学んでいる。そのくらいで音を上げるようでは、今後群れの中で生活することなどできない。

ノルディは長い睫毛を伏せ、口元に薄らと笑みを浮かべた。

「羊を追い回して川に落ちたり、癩癩を起こして木を薙ぎ倒したりするくらいには元気にしてますよ」

手に負えない腕白坊主はこの世界にもいるらしい。

「そりゃーいい。将来が楽しみだ！」

「ええ全くですよホントに……」

苦笑が引き攣りに変わっていく様を目撃してしまい、ユキノは慄いた。しかしアカンザはカラカラと笑い飛ばすばかり。どこかでフオローしないと、ユキノは密かに決意する。

「うん？ 明けましておめでとうって、つまりはもう新年ってことか？ 早いねえ、あつという間じゃねえか」

ノルディは疲れたように溜息をつくと首を振った。

「そうですね。立ち話も何ですから、どうぞ中へ」

「おう、邪魔するぜ」

ノルディが扉を開けると、アカンザはさつさと中に入っていった。またしても苦笑したノルディは、優しい青の瞳を巡らせると、ところで切り出した。

「雪乃、貴女のその格好は一体……」

隣でメイが激しく頷いて同意した。頭上の耳がぴょこんぴょこんと揺れる。

対するユキノは、ディディエスの外套の下からピースを繰り出した。

「馬族的、防寒対策でっす。オネーサンは二人羽織にだって挑戦しちゃうよ！」

とはいっても、ディディエスにおんぶしてもらい、それから二人を包むように外套を巻き付けただけであるが。

「足を怪我した……とかじゃないんですか？」

目を丸くして見上げるメイ。

「いやいや、怪我はないんだけどね。あ、遅くなっただけで芽衣ちゃんお久しー。今年もよろしくね」

「あ、はい！ 今年もよろしくお願いします！」

ガバツと頭を下げると、遅れて耳も前に倒れる。ディディエスがぼそりと呟いた。

「珍妙な姿だ」

瞬間、刺さるような青の視線が向けられ、ユキノは慌てて彼の頬をぺしぺし叩いて合図した。自分だって遠目から見た時、何だろうあの生き物、とは思った。だが近付いてみれば、ウサギ耳の付いた毛系の帽子に、獣型の手袋とルームシューズ。白のウサギさんグッズに身を固めた可愛い女の子だった。だがディディエスにはそれを見たままでしか捉えられなかったらしい。ユキノからの合図も全く理解した風もなく、されるがままになっている。

「……馬族の目に、これはどう映ります」

低い声で問われ、ユキノはヒヤリとした。しかしそんな空気など当然察するはずもない黒髪の男は一言。

「妙」

「わあ可愛いなあ！ 超可愛いなあ！ 私が今まで見た中で一番イケてる格好じゃない？ 凄い、これもしかして全部手編み！？ わあー、いい奥さんぶりじゃない、このこの。ノルディ様羨ましーッ！」

最後はほとんど絶叫していたが、その甲斐あつてか、ノルディはふんと鼻を鳴らすとメイの肩を抱いて中に入っていく。お気に入り少女の力作を妙と評されるのも不快だが、恐らくディディエスが賛辞を送っていたらそれはそれで不機嫌になっただろう。

「め、面倒臭い……」

幸いなのは、馬がウサギを食べることはない知っているがゆえ、ノルディに多少の余裕があることだろう。

ぐったりと脱力していると、男が首を巡らせた。

「帰るか？」

ユキノは黙って元凶の後頭部に頭突きを食らわせた。

居間の暖炉には火が灯され、爆ぜる音を立てて薪が燃えていた。下ろしてもらったユキノは早速その前に陣取ると、両手に息を吹き掛けた。先程までデイデイエスの首に回していたため温かったが、炎には敵わない。カイロの役目を免除されたデイデイエスは、手持ち無沙汰そうに室内をうろろと歩き回り始めた。

「雪乃さんて寒がりなんですか？」

隣で同じように絨毯の上に座りながらメイが尋ねた。

「冬生まれの一番好きな季節が、冬とは限らないってことだねー。寒いの大嫌い。……ところでこれ、凄いな。本当に芽衣ちゃんが作ったの？」

手を伸ばし、長い耳をむにむにすると、メイははにかんで頷いた。「羊の国の常識なんですって。年末に来年への想いを込めて編み物をするそうなんです。今年は卯年だから、こうなりました」

「へえー、そんな風習があるんだ。羊さん器用なんだねえ。じゃあ、次も楽しみだね。辰でしょう？ ……辰……」

「子丑寅卯辰……辰、ですね……」

辰って龍のことだっけ？

二人は互いの目を凝視した。そしてメイはアカンザの正面のソファに優雅に腰掛ける主を振り返る。

「どうしましょう、ご主人様。実物を見ないで作れる自信がありません」

ノルディは乾いた笑みを零した。真実を告げるべきか、否か。メイの苦労を考えればここらで話してあげるべきとは思うのだが、来年がどうなるのか、ちよつと見てみたい気もする。

葛藤中のノルディの思考を妨げるように、彼の正面のソファに偉そうにふんぞり返っていたアカンザが声を上げた。

「で？ あたしらをわざわざ呼んだってことは、用があるんだろ。」

「話せよ」

ノルディは視線を戻すと居住まいを正した。

「ええ。貴女方を呼んだのは、芽衣の愛らしさを見せ付けるためでも、はた迷惑な仔馬達を引き取って欲しいとお願いするためでもなく。そこに積まれている箱を届けて欲しいと思ったからですよ」

はた迷惑な、をやけに強調しつつ話すノルディに、ユキノは頭を抱えた。穏やかに話す羊の長だが、内心は色々と複雑そうである。

「えー、ご主人様、話が違いますわ！ 私と一緒に行って渡したいんですって、前からお願いしていたじゃないですか」

「芽衣、それは諦めておくれ。お前がいなくなってしまうっては、誰が私達の毛を梳いてくれるんだい？」

身支度くらい自分でしろよ、とツツコンではいけないのだろう。

ユキノは自重した。触らぬバカツプルに祟りなし。他人のことながら恥ずかしくて頬が熱くなってきた。

「ちよつとの間でも駄目ですか？」

「芽衣が側にいないなど耐えられない。私にそんな苦痛を与えるつもりなのか？」

「どうしても？」

「どうしても」

「そう……ですか……。ああ、とっても残念です。ご主人様、後でもふもふさせて下さいね」

それを聞いたノルディは実に鮮やかな笑顔を浮かべた。

「私で良ければ、いくらで」

「そんなことより」

ぎゃああ、とユキノは内心で悲鳴を上げた。ノルディは言葉を途中で遮られ、ムツとしながら発信源を振り返る。ディディエスは拳の裏でコツコツと積み上がった箱を叩いていた。

「先日より運搬方法の見直しに伴い、中身を改めるようになったのだが。これは一体何だ？」

何もこんなピンクの空気の時に水を差さなくても！

同じような内容の応酬が続いたため、話を変えるのは今だと思っただろうが。

慌ててディディエスの元に駆け寄り、口を塞いでみるがもう遅い。部屋の中を温めていた何かはすっかり流れ去り、寒々とした冷気が漂っている。けれども、その空気に気付かなかったのは何も馬族だけではないようだった。

「あ、それはですね！」

メイは顔を輝かせながら側にやってくると、箱の一つを開け、ユキノに差し出した。

「私とお揃いなんです」

照れたように笑う。ユキノは渡された帽子とブルマーを見て、一瞬何ともいえない表情をしたが、本人の手前ともあっていそいそと装着した。

「あ、これいいかも」

使ってみると、予想を裏切らない暖かさ。ユキノは目を丸くした。「いいわ、これ。もしかして、貰っちゃって良かったりして……？」

「どうぞ。使って貰えたら嬉しいです」

「……………！」

ユキノはメイの手を握り締めた。白い手袋に包まれた両手は、温かい。

「天使！ 天使がここにいる！ ノルディ様、この子を私に下さい！」

「あげるわけがないだろう」

ノルディから冷たく却下されるが、テンションの上がったユキノは彼女に抱きついた。あつ、こらと怒られるが、メイ本人から拒絶されなかったので気にしない。

「やだ芽衣ちゃんごめんねー。マジ嬉しいわあ。防寒具が欲しいと思ってたところだったんだ。使うよ勿論。私変温動物だからさあ、身体が温まらないと動けないんだよねー。異世界補正恐るべし」

「えっ、嘘！」

「嘘だけど」

「~~~~もうつ！」

きゃっきゃと女の子同士でしばし戯れると、ユキノは彼女を放して腕組みをした。

「困ったなあ。こんなことなら、こつちも何か用意しておくんだっ
たよ」

「え、いいですよそんな。私から皆さんにあげたくて作ったただけ
すもの」

「何だこの天使。うーん、じゃあ、仕方ないから特別に、芽衣ちゃんにはユキノさんをあげようじゃないの！」

胸を叩いてするアピールすると、強い力で肩を引かれた。くるりと方向を変えられ、目と鼻の先には浅黒い顔があった。

「それは駄目だ。ユキノはやれない。もしどうしてもというのであれば、俺をやる」

「それは却下です」

ノルディから再び駄目出しが出る。ユキノはディディエスを押しのけるとメイと顔を見合わせ、吹き出した。二匹のウサギ達の笑い声に、ノルディもやれやれと呆れたように笑い。アカンザとディディエスは視線を交わして、片方は肩を竦め、もう片方は首を傾げた。すると、部屋の外からうずうずと様子を窺っていたらしい小さき者達が、我慢しきれずになだれ込み――。

もこもこの国の、雄々しい長様の屋敷には、いつまでも明るい笑い声が響いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7812o/>

馬の世界にとりっぷ！

2011年8月11日12時45分発行